みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

スペイン領南米における先住民共和国の創設

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009046

三　スペイン領南米における先住民共和国の創設

齋藤　晃

序　論

一九六〇年代後半、ペルーの人類学者フェルナンド・フエンサリダ・ボルマールは、「ペルーの先住民共同体の植民地時代の母胎」（Fuenzalida Vollmar 1967-1968）と題する小論を発表した。この論文はその重要性に見合うだけの注目を集めなかったが、その中で彼は、「先住民共同体が中央アンデスの農村社会の典型的特徴をなしている」事実を強調している。彼はその特徴を概観し、その歴史的形成を「植民地時代の母胎 matriz colonial」と彼が呼ぶものとの関連で説明している。すなわち、新大陸の征服に際してスペイン人が先住民に課した支配と搾取の体制である。

フエンサリダ・ボルマールがこの洞察力に富む論文を発表したとき、アンデス地域の民族学はその黎明期にあった。記念碑的な『南米先住民ハンドブック』（Steward 1946-1959）の刊行は、インカ帝国を原初的共産主義の到達点、先住民共同体をその残滓とみなすマルクス主義のパラダイムに終止符を打った。現地調査に基づくデータは次第に増大し、その蓄積に基づいてフエンサリダ・ボルマールは、「ペルーの先住民共同体は征服の産物である」（Fuenzalida Vollmar 1967-1968: 95）という仮説を提起したのである。彼はさらに、先住民人口の集住化、租税と賦役の徴発、市参事会と信徒会の設置など、共同体の形成に寄与したと思われる植民地政策のいくつかを指摘している。

今日の我々は、かつてスペインの植民地だった地域の先住民共同体の仕組みについて、はるかに多くのことを知っている。もっとも、その起源に対するフエンサリダ・ボルマールの関心を共有する者は、決して多くない。ある種の本質主義が歴史的探求の妨げとなっているのである。例えば、アンデスの民族誌研究では、先住民共同体は「アンデス的andino」なもの、すなわち、列島型土地利用、互酬性、アイユ親族集団、双分組織、山の神と地母神への信仰などを本質的特徴とし、それらを変化させるいっさいの外圧に抗してきた存在として描かれがちである。確かに、時間の流れに敏感な民族誌研究もたくさんあるが、そうした研究は、資本主義経済の成長やナショナリズムの高揚、政治的ラディカリズムの浸透やNGOの活動、生態系の破壊など、比較的近年の変化に関心を寄せる傾向にある。

今日の先住民共同体の特徴のいくつか、例えば、碁盤目状の街区や市参事会、カトリックの祭礼が、スペインによる征服に由来していることは明らかである。しかし、ヨーロッパから導入された制度や慣行、価値が、先住民に押しつけられ、彼らにより同化されて、伝統の一部となっていく複雑な過程に光を当てた研究は、決して多くない。[1] 征服当初の破壊と混乱が終息したあと、いつごろ、いかにして先住民の間で新たな総合が達成されたかについて、我々は詳しく知らないのである。

フランスの歴史学者ナタン・ワシュテルによれば、スペイン統治下の先住民社会の変容は、個々の要素が取り除かれたり、付け加わったりするといった単純なものではない。それは、自己の定義という深いレベルにまで達している（Wachtel 1992）。ワシュテルは、チパヤとユラとクルタというボリビア高地の三つの民族に関する研究（Abercrombie 1986; Rasnake 1988; Wachtel 1990）を参照しながら、彼らのアイデンティティが「植民地支配下の先住民世界の変容の帰結」（Wachtel 1992: 39）であると示唆している。ワシュテルの仮説では、それらは植民地時代末期に新たに形成されたものなのである。従来の研究がしばしばケチュアやアイマラ、グアラニなどの言語的範疇を民族的範疇と同一視し、それらが征服以前から途切れることなく存続していると想定していたことを思えば、ワシュテルの議論は大きな前進と

いえる。

本論は、フエンサリダ・ボルマールやワシュテルの先例に倣って、スペインの旧植民地における先住民共同体の「植民地時代の母胎」を究明する試みである。本論は、ボリビア低地の先住民モヘーニョに焦点を当て、彼らのアイデンティティの形成過程を明らかにする。本論はまた、モヘーニョの事例をスペインによる南米の植民地化という幅広いコンテクストの中に位置づける。とりわけ、モヘーニョがたどった歴史的軌跡をアンデス高地のアイマラ語系諸民族のそれと比較し、共通点を明らかにする。筆者が強調したいのは、スペインの植民地政策が及ぼした画一化の効果である。先住民人口の集住化、スペイン人と先住民の居住空間の分離、市参事会の設置などの諸政策は、民族的・言語的差異にかかわりなく、植民地全土で実施された。結果として今日、スペインの旧植民地の先住民の間には、高度な社会的・文化的均一性が認められるのである。

南米の植民地が一九世紀初めにスペインから独立してからも、先住民共同体はときどきの状況に応じて変化し続けたという自明の事実を否定する意図は、筆者にはない。しかし、筆者の考えでは、植民地時代末期には、ワシュテルが「結晶化」と呼んだ現象が生じ、新たな社会形態が先住民の間で明確な形をなすに至るのである。[2] この時期、征服以前に起源がさかのぼる民族集団は消滅し、その残滓から新たな社会が姿を現した。それらの社会は今日の先住民共同体の基本的特徴を備えており、その先行形態とみなすことができる。本論では、それらを「先住民共和国」と名づけ、スペイン統治下のその形成過程をたどってみたい。他方、「先住民共同体」という名称は、一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、資本主義経済の成長と国民国家建設の圧力のもとに出現した社会形態を指すものとして使いたい。先住民共和国から先住民共同体への移行過程を解明することは、重要な課題だが、本論では扱わない。

モホスにおける民族の生成と言語の形成

初めに、モホス地方とその先住民の概略を述べておきたい。同地方の地理的範囲はおおむね今日のボリビア共和国ベニ県に相当する。ベニ県はアマゾン川流域の南西の端に位置し、気候は熱帯である。地表の大部分はサバンナで覆われており、アンデス山脈からアマゾン川に流れ込む幾多の河川がそこを横断している。

植民地の主要都市から遠く離れ、貴金属を産出しないため、征服当初、スペイン人がサバンナに分け入ることは稀であり、数少ない植民地化の試みはいずれも失敗に終わっている(Chávez Suárez 1986: 53-166; García Recio 1988: 21-78)。モホス地方で最初に本格的な植民地化事業を企てたのは、カトリック系修道会のイエズス会である。同会の宣教師は一六七〇年代にミッション建設を開始するが、当時サバンナには数多くの民族が暮らしていた。彼らはさまざまな言語を話し、河川に沿って広く散在し、狩猟と漁労と焼畑農耕を営んでいた。イエズス会が最初に接触したのはマモレ川上流の諸民族である。彼らの多くはアラワク語系の言語を話したため、宣教師は民族的差異を無視して彼らを「モホ mojo (または moxo)」、その言語を「モホ語 lengua moja (または lengua moxa)」と呼んだ。一七世紀末、イエズス会員は彼らの間にロレト、トリニダ、サン・イグナシオ、サン・ハビエルの四つの町を建設した。その後、宣教師たちは活動範囲をマモレ川下流、サバンナ西部、そして北東の森林地帯に拡大した。最盛期には、モホス地方のミッションは二〇以上の町、三万五千以上の人口を擁していた(図1)[3]。

現代の民族学の文献では、イエズス会員が「モホ」と呼んだ人々の子孫は「モヘーニョ mojeño」という名で知られている[4]。筆者は一九九四年以来、彼らの間で数回、民族学調査を実施した。今日、彼らの大多数は小さな集落に散らばって暮らしている。イエズス会が建設した四つの町も存続しており、相当数の先住民が「白人 blanco」を自称する人々と肩を並べて暮らしている。先住民たちは、四つの町以外の場所に住んでいる場合でも、それらの町の一つを故郷

図1　スペイン領南米の主なイエズス会ミッション

とみなし、そこに強い帰属意識を持っている。実際、モヘーニョにとって、町への帰属意識は民族意識と同一である。彼らは自分たちのことを「モホ」や「モヘーニョ」とは呼ばない。彼らの名乗りは「ロレタノ loretano」、「トリニタリオ trinitario」、「イグナシアノ ignaciano」、「ハベリアノ javeriano」である。これらのスペイン語は、字義どおりには、「ロレトの住民」「トリニダの住民」「サン・イグナシオの住民」「サン・ハビエルの住民」を意味する。[5]

筆者はこれらの集団を「民族」と呼んでも支障はないと考えている。なぜなら、集団への帰属は居住ではなく出生により決まるのだから。例えば、トリニタリオの夫婦の子供は、どこに住んでいようと、トリニタリオなのである。多くの人々が故郷の町以外の場所に住んでいるのは確かだが、そのことは彼らの帰属意識を弱めはしない。そもそも、モホス地方では、人口の広範囲な分散は比較的近年の現象である。それは一九世紀中葉に始まり、二〇世紀に加速した。それ以前には、先住民の大多数が四つの町とその近郊で暮らしていたことが、歴史資料からうかがわれる。

モヘーニョの諸集団は社会的・文化的特徴の多くを共有している。彼らはいずれもカトリック信仰を核とする宗教色の強い文化を維持しており、彼らの共同体は「カビルド cabildo」と呼ばれる自治組織により統治されている。集団名称と帰属意識以外に彼らを区別するものとしては、言語がある。実際、四つの集団はモホ語の異なる方言を話す。つまり、ロレタノはロレタノ方言、トリニタリオはトリニタリオ方言、イグナシアノはイグナシアノ方言、ハベリアノはハベリアノ方言を話すのである。[6]

以上の事柄は、先住民の間にイエズス会員が建設した四つの町が、民族生成と言語形成のための鋳型として機能したことを示唆している。つまり、トリニダの町に集められた人々は、やがて社会的に統合され、共通のアイデンティティを獲得して、自らトリニタリオを名乗るようになったのである。彼らはまた共通の言語も作り出した。そして、町の人口が分散したあとも、共通のエスニシティと言語を維持し、トリニダを故郷とみなし続けているのである。

本論は、次の二つの仮説を証明しようとするものである。第一の仮説は、今日のモヘーニョのエスニシティと言語

は、植民地化以前にさかのぼる過去の遺産ではなく、スペイン統治下、先住民が生き抜いた社会的・文化的変容の帰結である、というものである。第二の仮説は、この民族生成と言語形成の過程で、町の建設とそこへの先住民の集住化が決定的な役割を果たした、というものである。本論で筆者は、イエズス会員が町に集めたさまざまな民族が共同生活を営むためどのような折り合いをつけたのか、そして彼らの間にいかにして新たな社会形態が出現したのかを説明したい。また、ロレタノ、トリニタリオなどの名称がいつごろ登場し、それらがいかにして集団名称となったのかも明らかにしたい。

先住民の社会的・文化的均一性

モヘーニョの事例を詳しく考察する前に、視野を広げて、南米におけるスペインの植民地政策と先住民へのその影響を概観しておきたい。この寄り道は必要である。なぜなら、筆者の考えでは、モヘーニョがたどった歴史的軌跡は、同様にスペインの植民地支配を生き抜いた他の地域の先住民の経験と、実質的に同じなのだから。この点で、アンデス高地の先住民との比較はとりわけ啓発的である。アンデスでも、先住民は大きな町に集住させられた。そこにはイベリア半島の市参事会制度が導入され、キリスト教が広められた。アンデスの先住民の事例がモヘーニョのそれと異なる点は、聖職者ではなく行政府の役人が、集住化を実施したことである。もっとも、この政策の長期的帰結は同じである。すなわち、町に集められた人々は次第に結束し、共通のアイデンティティを持つに至るのである。彼らの中には、モヘーニョと同様、町の名称を名乗りとする集団さえある。[7]

筆者の考えでは、かつてスペインの植民地だった地域の先住民の際立った特徴の一つは、その社会的・文化的均一性である。この均一性は、先住民社会の基本単位である共同体に明瞭にみてとれる。典型的な共同体は、中核となる町とその衛星集落から構成される。町のレイアウトは驚くほど画一化されている。家屋と街路は碁盤目状に配され、正方形

または長方形の広場が町の中央を占めている。共同体には平等主義的な自治組織があり、その役人は毎年、住民の中から選ばれる。国家の行政機構、そしてときには労働組合やＮＧＯを除いて、共同体より上位のレベルの権力は存在しない。キリスト教は共同体の生活の本質的要素である。町はそれぞれ守護聖人を仰ぎ、住民たちはその祭礼を毎年、熱心に執り行う。

先住民は共同体への強い帰属意識を持っている。このことは、共同体の成員が集団の名乗りとして町の名称を用いることがある、という事実にみてとれる。先住民にとって共同体は全世界である、とまでいえば、誇張のそしりを受けるに違いない。なぜなら、彼らは「先住民 indígena」、「農民 campesino」など、共同体を越えたアイデンティティも保持しており、それによって自分たちと「白人」とを区別しているのだから。「ボリビア人 boliviano」という国民的アイデンティティや「ベニ人 beniano」という県民意識も、今日では広く共有されている。しかし、先住民が使い分けるさまざまなアイデンティティの中で、共同体への帰属意識が今日でも最も基本的であるといっても、大きな間違いではないだろう。

スペインの旧植民地の先住民の間には、言語的差異や国家の境界、生態系の違いを越えて社会的・文化的均一性が認められる。例えばモヘーニョは、植民地時代にキリスト教化しなかったアマゾン低地の隣人よりも、アンデス高地の先住民との間により多くの共通点を持っている。筆者の考えでは、この社会的・文化的均一性は、主として植民地時代のスペイン人の対先住民政策に起因している。実際、スペイン人は、征服以前に大規模な王国が栄えていたアンデスの寒冷な高地でも、狩猟採集民の小集団が移動を繰り返していたアマゾンの熱帯低地でも、ほとんど同じ植民地化の方策を採用した。スペイン人にとって、南米の先住民は一様に秩序ある社会を作り上げる能力を欠いており、それゆえ彼らが先住民のためにそうした社会を作る役割を買って出たのである。

イエズス会ミッション、とりわけラプラタ地域のグアラニー語系先住民のそれに関する従来の歴史研究は、その特異

性を強調しすぎているように、筆者には思われる。マグヌス・メルナーやニコラス・クシュナーのような一部の研究者を除いて[8]、歴史学者の多くはイエズス会のミッション建設事業を、スペイン人の実行支配が及ばない辺境地域で展開された孤立した企て、またはスペインの植民地化事業に対抗する一種のオルターナティヴのようにとらえてきた。確かに、イエズス会ミッションには特異な点があり、また利害の相違がしばしば宣教師を植民者と対立させたのも事実である。しかし、広い視野でみるなら、イエズス会ミッションはまぎれもなくスペインの植民地化事業の一要素である。先住民社会を作り替えるため宣教師が採用した方法も、植民地の他の地域で用いられた方法と基本的に同じである。筆者の考えでは、この画一的な植民地政策は、スペインの旧植民地の先住民に対して持続的な影響を及ぼしたのである。

集住化政策

それでは、スペイン人が南米の先住民に対して画一的に採用した植民地化の方策とは、どのようなものだったのか。ここで、決定的重要性を持つと筆者が考える一つの政策を取り上げたい。それは、先に言及した、先住民を大きな町に集めて住まわせるという政策である。スペイン領南米では、この強制移住政策は通常「レドゥクシオン reducción」と呼ばれていた。この政策により創設された町も「レドゥクシオン reducción」、または単に「先住民の町 pueblo de los indios」と呼ばれた。

奇妙なことに、この重要な政策に関する本格的な研究は存在しない[9]。アンデス地域の歴史研究では、どんな概説書も一五七〇年代、第五代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドがアンデス全土で実施した大規模な集住化に言及している。しかし、このテーマを扱った研究の大部分は、似たり寄ったりの概略的記述を繰り返すだけで、これほど野心的な企てがいかにしてこれほど広い地域で実施されたかについて、詳しく語ってくれない[10]。加えて、研究者の多くが集住化政策を失敗と決めつけ、先住民社会のその後の変化に対するこの政策の影響を否定していることが、事態を悪化させて

いる。例えば、ペルーの歴史学者アレハンドロ・マラガ・メディーナは、「トレドにより創設されたレドゥクシオンは非常に短命に終わった」(Málaga Medina 1974a: 163; Málaga Medina 1974b: 842; Málaga Medina 1975: 41, 42; Málaga Medina 1993: 304)、と明言している。研究者たちは、集住化で創設された町の住民は、早々と出身の集落に戻ってしまったか、租税と賦役の負担から逃れるためよそに移住してしまった、と主張している(Duviols 1972: 248-263; Spalding 1984: 225-226; Wightman 1990: 9-44)。

本格的な研究が存在しない以上、集住化政策が先住民に与えた長期的影響について決定的な判断を下すことはできない。しかし、モヘーニョに関する筆者自身のデータを含めて、現時点での歴史人類学的知見を総合すれば、この政策こそが以後数世紀にわたる先住民社会の変化の方向を定めたと推定されるのである。[11]「非常に短命に終わった」どころか、多くのレドゥクシオンは今日まで生きながらえている。町に集められた先住民が分散し、移住したことは確かだが、そのことは、課税目的で彼らをレドゥクシオンに押し込めようとした植民地官僚を除けば、「レドゥクシオンの失敗」(Wightman 1990: 9)を必ずしも意味しないのである。

集住化政策の目的は何だろうか。数ある目的のうち、ここでは二つだけ指摘したい。最初の目的は、先住民のキリスト教化である。周知のことだが、キリスト教の宣教は、金銀への渇望に加えて、スペインによる新大陸征服の強力な動因だった。王室がこの使命を真剣に受け止め、それを遂行するため可能なあらゆる措置を講じたことは疑いない。もっとも、一六・一七世紀を通じて、植民地のカトリック教会は絶えず人員不足に悩まされていた。先住民は小さな村落に分散しており、宣教師が彼らの居住地に赴いて信仰を説こうとするなら、膨大な人員が必要だった。巡回説教師として村から村へ渡り歩くかわりに、聖職者たちは先住民を大きな町に集めるという方法を採用した。それらの町は、新たに創設されることもあれば、既存の町が造り直されることもあった。[12] レドゥクシオンは「ドクトリーナ doctrina」と呼ばれる先住民の小教区となり、当該地域の司教の管轄下に置かれた。町には聖堂が建てられ、教区司祭が一人任命され

た。

集住化政策の第二の目的は、先住民から租税を徴収し、賦役人員を徴発する作業を容易にすることである。スペイン領南米では、行政府は先住民の労働力を搾取する体制を構築し、レドゥクシオンはその搾取のための基本的枠組みとして機能した。一八歳から五〇歳までの成人男性は、人頭税を支払い、鉱夫や織工、使用人としてスペイン人のため働くことを義務づけられた（Spalding 1984: 161-166）。行政府は植民地全土の人口調査を実施し、個々の先住民は特定のレドゥクシオンの住人として登録され、許可なくして町を離れることを禁じられた。実際に租税を徴収し、賦役人員を徴発する役割は、町の先住民行政官に委託された。「カシケ cacique」と呼ばれるそれらの行政官は、在来の民族集団の世襲首長だった。征服後、彼らは植民地政府の役人として特権的身分を保障されたのである（Spalding 1984: 219-223; Thomson 2002: 29-44）。

スペイン領南米では、集住化政策は他の二つの重要な政策と密接に関連しており、それらと併せて実施された。その一つはスペイン人と先住民の居住空間の分離であり、もう一つはカビルドと呼ばれる自治組織の設置である。以下、一つずつ検討してみよう。

スペイン人と先住民の居住空間の分離は、基本的に前者の横暴から後者を保護することを目的としていた（Mörner 1970）。征服当初、スペイン王室は先住民が植民者からヨーロッパの生活様式を学ぶことを期待して、両者の交流を奨励した。しかし、実際に起きたのは、植民者による先住民の虐待と、先住民の道徳的退廃だった。カトリック教会の聖職者はこの状況を指弾し、彼らの中から征服戦争の正当性に疑義を投げかける者すら現れたため、王室は方針を変更し、スペイン人が先住民の町に住むことを全面的に禁止した。集住化により創設された町は、先住民の排他的居住空間とされ、そこに住むことを許されるスペイン人は教区司祭のみとなった。

「カビルド cabildo」、「コンセホ concejo」、「フスティシア justicia」などと呼ばれるイベリア半島の市参事会制度は、

一六世紀中葉以降、集住化により創設されたすべての先住民の町に導入された。[13] カビルドは町の自治組織であり、その役人は毎年、住民の中から選ばれた。主要な役職には、判事の「アルカルデ alcalde」、評議員の「レヒドール regidor」、警吏の「アルグアシル alguacil」、書記の「エルクリバノ escribano」などがあった。法律上は、前任者が後任者を選出することになっていた。彼らの主要な職務は、治安維持、紛争処理、罪人の処罰、風紀粛正、共同体の金庫の管理、カトリック信仰の促進などだった。カビルド役人はまた、先住民行政官が租税を徴収し、賦役人員を徴発するのを補佐した。後述するように、植民地時代末期には、カビルドは先住民の町の社会的統合の核となるのである。

集住化により創設された町は静態的な存在ではない。レドゥクシオンは成長し、分裂し、増殖する。アンデス高地では、一五七〇年代に副王トレドが創設したレドゥクシオンは、すぐさま増殖し始め、周囲にその複製を生み出すようになった。一度は町に集められた先住民は再び分散し、放棄されたはずの集落は不死鳥のようによみがえった。こうした状況に直面した行政府の役人は、集住化政策が失敗したと考えて危機感を抱き、対策を講じようとした（Málaga Medina 1993: 306-310; Wightman 1990: 20-24）。

先住民の人口分散を集住化政策の失敗の証とみなす役人たちの考えは、正しいのだろうか。一面では、そうといえる。なぜなら、先住民の移住は必然的に、役人たちが居住地で納税者を同定するのを困難にするのだから。しかしながら、先住民の人口分散は、次に述べる二つの理由で、征服以前の過去への単純な回帰ではありえない。第一の理由は、レドゥクシオンが消滅しなかったことである。[14] 植民地時代、先住民は二つの居住地を持ち、その間を行き来していた（Saignes 1991: 92, 108）。レドゥクシオンは通常、「エスタンシア estancia」と呼ばれる集落に取り囲まれていた。「エスタンシア」には農場や牧場があり、先住民はレドゥクシオンに家を持つとともに、そこにもう一軒の家を構え、一年の大半を農作物や家畜の世話をして過ごした。彼らが町へ赴くのは、市参事会の会議に参加したり、租税を支払ったり、市場で売り買いしたり、ミサに出席したり、祭礼を祝ったりするときのみである。法律上、すべての先住民は町に

住むべきなのだが、実際には、町は居住空間というより、政治的・経済的・宗教的活動の場だった。

第二の理由は、レドゥクシオンを去り、エスタンシアに身を落ち着けた先住民が、しばしば町の空間的・社会的特徴を再現しようとしたことである。彼らは集落を碁盤目状に造り直し、市参事会を設置し、役人を選出した。また、守護聖人を選び、礼拝堂を建設し、信徒会を組織し、祭礼を祝うようになった。もっとも、一六・一七世紀を通じて、カトリック教会は先住民のこれらの活動に厳しく対処した。聖職者はとりわけ、先住民が自分たちだけで典礼を執り行っていることに憤慨した。聖職者は先住民のカトリック信仰が異教的慣行を覆い隠す見せかけにすぎないと考えたのである。教会当局はしばしば先住民の集落を巡察し、礼拝堂を破壊し、宗教的指導者を捕縛した。しかし、一七世紀後半になると、教会は先住民のカトリック的実践を愚かだが無害な迷信とみなすようになり、強権的な弾圧を控え、以前より寛容な姿勢を示すようになった（Spalding 1984: 267-269）。そのおかげで、市参事会と信徒会を備えた比較的大きなエスタンシアは、その母胎であるレドゥクシオンの「アネホ anexo」、すなわち付属の町として認知されるようになった。アネホのいくつかは独立した小教区となり、司祭を常駐させるまでになった[15]。

以上の事柄は、集住化政策が先住民への一方的な強制のみではなかったことを示唆している。強制があったのは事実だが、先住民もまた率先して集住化に参与する、という側面もあったのである。碁盤目状のレイアウト、聖堂、守護聖人、市参事会などを構成要素とするレドゥクシオン・モデルは、先住民により深く内面化されたため、彼らは自分たちが逃れようとするその町の構造を至るところで複製しているのである。このレドゥクシオン・モデルの内面化こそ、先住民共和国の創設を可能にしたものなのである。

ミッションとは何か

スペイン領南米における先住民の町の基本的特徴をまとめてみよう。まず、先住民の町は集住化政策により創設さ

れ、複数の集落の住民がそこに集められた。次に、町は先住民の排他的居住空間であり、住民たちの自治組織により統治された。最後に、町は静態的な存在ではなく、植民地時代を通じて分裂と増殖を繰り返した。ところで、先住民の町には一つの重要な下位範疇がある。それは、「ミッション misión」と呼ばれる制度である。本節では、通常の先住民の町と比較した場合のその特異性を説明したい。

アマゾン川上流やラプラタ川上流など、スペイン領南米の辺境地域では、もっぱら一七世紀以降、カトリック系の修道会が先住民をキリスト教化するため集住化を実施した。聖職者により創設された先住民の町は「ミッション」、または単に「レドゥクシオン」と呼ばれた。ミッションにはいくつか特異な点があるが、ここでは三つだけ指摘したい。[16]

初めに、ミッションはキリスト教徒のための制度ではなく、宣教師が「不信徒 infiel」または「異教徒 gentil」と呼んだ非キリスト教徒のための制度である。当時の聖職者の進化論的図式によれば、「不信徒」または「異教徒」はミッションに集められ、教理の授業に出席するようになると「教理学習者 catecúmeno」となり、「教理学習者」は洗礼を受けると「新信徒 neófito」となった。「教理学習者」と「新信徒」は、十全なキリスト教徒、及びスペイン国王の臣下への移行状態にあるとみなされ、一定期間、租税と賦役を免除された（Armani 1982: 91-92; Mörner 1968: 35, 37, 55-56, 67）。

次に、ミッションを管轄する聖職者は常に「修道会所属聖職者 regular」、すなわちフランシスコ会、アウグスチノ会、イエズス会などの会員だった。これは当然である。なぜなら辺境地域のミッションは司教の管轄外にあるのだから。植民地の中核地域では、先住民の町は「ドクトリーナ」、すなわち先住民の小教区となり、当該地域の司教の管轄下に置かれた。しかし、辺境地域では、司教区はいまだ設置されておらず、非キリスト教徒への宣教に当たる聖職者は、所属する修道会の上長にのみ服していた。

最後に、宣教師は先住民に対して聖俗両面にわたる権限を持っていた。彼らは司牧活動を通じて先住民の魂の世話を

するだけでなく、市参事会の役人を指名し、犯罪者を裁き、紛争を調停し、農作業や放牧を監督するなど、世俗の事柄全般を管轄した。世俗的権限と宗教的権限が重複することは、確かに例外的だが、辺境地域には行政府の役人は常駐せず、宣教師が先住民と接触を持つ唯一のスペイン人であることを考慮すれば、やむをえない措置だった。[17]

このように、ミッションは明らかに暫定的制度としての特徴を示している。理論上は、先住民の間に確固とした信仰が根づいたあかつきには、ミッションは当該地域の司教に引き渡され、ドクトリーナとして司教区に編入されるはずだった。それと同時に、行政府の役人が派遣され、聖職者は以後、世俗の事柄に首を突っ込むことを禁じられるはずだった。さらに、先住民には租税と賦役の義務が課せられるはずだった。

しかし、実際には、ミッションからドクトリーナへの移行が完全に果たされることは稀だった。理由は単純である。植民地には十分な数の「在俗聖職者 secular」がおらず、教会当局は修道会の協力を必要としたのである。確かに、一七世紀中葉以降、多くのミッションが地元の司教の管轄下に置かれるようになった（Armani 1982: 93-94; Mörner 1968: 69-70）。しかし、司教はめったに介入せず、実質的には何も変わらなかった。行政府の役人が派遣されることはなく、宣教師は相変わらず聖俗両面の権限を持ち続けた。ミッションの先住民が王室に支払うべき租税は、王室が教区司祭の任に当たる宣教師に支払うべき聖職録と相殺された（Mörner 1968: 67, 85, 129, 131）。賦役の義務も、ミッションの先住民はポルトガル領との国境警護の務めを果たしているという理由で免除された（Armani 1982: 91-92; Mörner 1968: 55-56, 67, 95）。

以上の事柄は、ミッションとドクトリーナの間に明確な境界線が引けないことを示している。両者の違いは実質的というより状況依存的なのである。結局、両者はともに先住民の町という同じカテゴリーに属しており、スペイン人は両方ともレドゥクシオンと呼んでいるのである。にもかかわらず、イエズス会ミッションの研究者は、両者をあたかも天国と地獄のごとく対比させがちである。研究者はしばしばミッションを「ユートピア」と形容し、スペイン人による専

政と抑圧のただ中にある解放区のように描いている。[18] しかし、これまで述べてきたように、イエズス会ミッションは通常の先住民の町と同じ植民地政策により生み出されたものである。筆者の考えでは、イエズス会のミッション建設事業が「ユートピア的」といえるとすれば、それは、それがその一部であるスペインの植民地化事業と同じ程度にそうなのである。

先住民共和国

モヘーニョの事例でみたように、植民地時代、集住化政策により創設された先住民の町は、新たな社会が形成される鋳型として機能した。なかば恣意的に同じ町に集められた人々は、次第に統合され、やがて共通のアイデンティティを持つに至るのである。こうして成立した社会は、今日の先住民共同体の先行形態とみなしうる。本論ではそれらの社会を、当時の言葉を用いて「先住民共和国 república de los indios」と名づけたい。

植民地時代、「レプブリカ república」という言葉は、広義には政治体制一般を、狭義には、古代ギリシャのポリスを典型とする、自治組織を備えた都市や町を意味した（Góngora 1975: 100; MacCormack 2007: 101-136; Mörner 1970: 17-19）。新大陸征服以後、スペイン人は植民地全土にわたって多くの都市を建設した。それらの都市の一つ一つがレプブリカにほかならない。後に、集住化政策により多数の先住民の町が生み出された。結果として、植民地には、スペイン人のレプブリカと先住民のレプブリカが併存するようになった。ただし、両者の居住空間は分離されており、彼らが入り交じって同じレプブリカを構成することはなかった。

レプブリカは都市空間であり、そうでなければならないと考えられていた。なぜなら、当時のスペイン人の考えでは、人間は一か所に集まり、社会を作り上げ、秩序ある共同生活を営むことで、初めて人間としての資質を開花させることができるのだから。自然のただ中で一人暮らす人間は、動物以下の存在でしかないのである（Mörner 1970: 17-19;

Pagden 1982: 68-71)。

レプブリカは、その住民が自分たちの中から代表者を選び、統治の任務に当たらせるという意味で、民主的な政治制度である。実際、レプブリカの政治的正当性は、それが住民自身の自治組織であるという認識に基づいていた。植民地時代、「レプブリカ」という言葉は都市や町のみならず、その自治組織であるカビルドも指していたが、それはそうした認識を反映している。ところで、政治思想史の観点から興味深いのは、レプブリカと「君主政 monarquía」との関係である。近代初期のヨーロッパでは、いずこでも、大きな財力と軍事力を持ち、発達した官僚機構を備えた集権的君主国が台頭するが、それに応じて、君主の権力は神に由来する、という考え方が力を持つようになった。もっとも、スペインでは、個人が生まれながらにして持つ自然権を強調するスコラ学の思想もまた、大きな影響力を持っていた。フランシスコ・デ・ビトリアやフランシスコ・スアレスのような神学者は、君主の権力はもともと自由な個人の結合体であるレプブリカが彼に委譲したものであり、この委譲は君主がその権力を「共通善 bien común」の実現のため行使するという条件のもとでなされた、という議論を展開した。つまり、近代初期のスペインでは、王権は神に由来するという考えと王権は人民に由来するという考えが併存し、拮抗していたのである。大きな君主国の中に小さな共和国が林立する状況が、国家の主権に関する二つの考えが競合する舞台を提供していた（Pagden 1990; Stoetzer 1979; Tierney 1997: 288-315）。

都市空間と自治組織は、スペイン人のレプブリカと先住民のレプブリカに共通する主要な特徴である。とはいえ、後者はイベリア半島の制度が在来のそれに強制的に接ぎ木され、両者の複雑な相互作用の結果として成立したという点で、スペイン人のレプブリカとは大きく異なっていた。実際、先住民のレプブリカは、新大陸征服から二世紀近くを経た後、ようやく達成された社会的・文化的総合なのである。

筆者の考えでは、先住民共和国の成立は、必然的に征服以前の過去からの断絶を意味する。というのも、先住民共和

国は、征服以前に起源がさかのぼる民族集団が解体されない限り、確立されえないのだから。それらは在来の民族集団の灰の中からのみ姿を現すのである。

一例を挙げよう。征服以前、南アンデス高地では、アイマラ語を話す諸民族が王国を築き、互いに覇を競い合っていた。[19] 一五七〇年代、副王トレドの集住化政策により、それらの王国の住民はなかば恣意的にレドゥクシオンへ振り分けられ、世襲首長は町の行政官の地位に格下げされた。時がたつにつれ、かつての王国は徐々に瓦解し、その記憶は薄れていった。そして、それぞれの町の内部では、カビルドを核として、新たな社会が形をなしていった（Abercrombie 1998: 213-314; Rasnake 1988: 93-165; Wachtel 1990: 413-520）。前述のように、この社会的再編成は、アイデンティティの根本的な変容を伴っていた。例えば、米国の人類学者ロジャー・ラスネイクが調査したボリビア、ポトシ県の町エンカルナシオン・デ・ユラの住民は、一七世紀初めには、他の二つの町とともに「ウィシサ wisijsa」という民族集団を構成していた。しかし、一八世紀末には、「ウィシサ」という言葉は記録から消滅し、町の住民は「ユラ yura」という名称で呼ばれるようになっていた（Rasnake 1988: 95-137）。この「ユラ」こそが、一九七〇年代末、ラスネイクが民族学調査を行ったとき、町の住民が名乗りとしていたものだった。

アンデス高地では、集住化は在来の諸王国を細分化した。他方、アマゾン低地では、全く逆のことが起きていた。アマゾンでは、スペイン人の到来以前、小規模な民族がひしめき合い、猟場と河川網へのアクセスを求めて競い合っていた。人口一千人以上の大きな町を建設するためには、スペイン人は複数の民族を糾合しなければならなかった。その結果、彼らは多民族の寄せ集めを一つのレプブリカに統合するという困難な課題に直面するはめになった。記録によれば、新たに建設された町では、民族を異にする人々は互いに避け合い、決して入り交じろうとしなかった。そのうえ、住民たちは異民族出身のカビルド役人に従うことを拒否した。アマゾンにおける先住民共和国の創設は、この困難な状況の克服を前提としていた。次節以降では、モホス地方を例にとって、その過程を詳しくみていきたい。

アンデスでもアマゾンでも、先住民共和国の創設は、在来の民族集団が瓦解し、先住民社会がレドゥクシオンの枠組みで再編成されることを要求した。このプロセスを経て成立した新たな社会は、先住民のアイデンティティのよりどころとなるだけでなく、主権のよりどころともなった。というのも、レドゥクシオンの住民は結束して「コムン común」、すなわち共同体となり、政治的自律を重んじ、それを侵害する者に徹底抗戦するようになるのだから。このことは、一八世紀後半に南アンデス高地で頻発する民衆蜂起、とりわけ一七八〇年から八一年にかけての大反乱に、明瞭にみてとることができる。[20] これらの武装蜂起において民衆を導いた政治理念は、「コムン」の自治である。例えば、現在のボリビア、ラパス県のカキアビリの先住民が一七七一年に町を制圧したとき、彼らは、「コレヒドール〔スペイン人の国家官僚〕は死に、他に行政官がいないいま、コムンこそが王であり、そのために統治はなされる」、と宣言している（Thomson 2002: 151; Thomson 2005: 58）。

植民地時代末期、一般の先住民は植民地体制にきわめて批判的になり、政治的自律を声高に要求するようになる。先住民は通常、植民地当局が設定した範囲内で自治権を行使したが、必要なときには当局の命令に逆らうことをためらわなくなった。町の住民の自治組織としてのレプブリカの理念が、先住民によりこれほど深く内面化されたことは、特筆すべきことだろう。筆者の考えでは、この政治理念が先住民社会に浸透した主要な回路の一つは、市参事会である。カビルドはレドゥクシオンのただ中に、誰もが参加でき、高い地位まで昇ることができる新たな政治空間を切り開いたのである。南アンデスでは、この民主的制度は、世襲首長が体現する在来の権威と衝突せざるをえなかった。首長たちの権力の正当性は、彼らが征服以前の諸王国の支配者の子孫であるという認識に基づいていた。だからこそ、世襲首長は先住民共和国の一部にはなりえなかったのである。最終的に、権力の二つの形態は深刻な対立に陥る。一八世紀後半には、南アンデス各地で一般の先住民が首長に対して武装蜂起し、彼らをスペイン人官僚とともに殺害するという事件が頻発するのである（O'Phelan Godoy 1997; Penry 1996; Thomson 2002）。

モホスにおける民族の集住化

本論ではこれまで、スペイン領南米の植民地政策の基本的特徴、及びその政策が先住民社会に与えた影響をみてきた。とりわけ、先住民人口の集住化に注目し、それが「先住民共和国」と筆者が名づけた社会形態の成立を促したありさまを考察した。さらに、ミッション制度の特異性を把握し、修道会の宣教活動とスペインの植民地支配との関係を再考した。以下の諸節では、モホス地方に話を戻し、イエズス会宣教師が創設した町のただ中に新たな社会が形成されるプロセスを詳しく検討したい。

イエズス会がモホス地方で本格的な宣教活動を開始するのは、一六七〇年代である。当初、宣教師たちは、現在のボリビア、ベニ県のマモレ川上流のアラワク語系先住民に狙いを絞っていた。彼らは先住民の居住地域の綿密な実地調査を行い、村の位置や人口、民族、言語、宗教などについて詳細な報告書を作成した。[21] それらの報告書のおかげで、我々は当時のモヘーニョの地理的分布と社会的編成を知ることができる。

報告書の中で、イエズス会員は、家族より上位のレベルにある三つの社会的範疇を区別している。すなわち、「プエブロ pueblo」、「パルシアリダ parcialidad」、「ナシオン nación」である。プエブロは人口二〇人から二〇〇人ほどの村落を意味する。プエブロには一人の首長がおり、プエブロの名称はしばしば彼の名前に由来していた。首長は戦争や移住のときに指導力を発揮する以外、限られた権限しか持たなかった。モヘーニョの首長の地位が世襲だったかどうかは、はっきりしない。宣教師の一人が「現在カシケ〔首長〕職にある者は、亡くなったカシケの息子か兄弟である」(Castillo 1906: 339) と述べているところをみると、世襲だったのだろう。[22] プロブロはきわめて不安定であり、頻繁に場所を変えたり、分裂したり、別のプエブロと合併したりした。

パルシアリダは、複数のプエブロからなる比較的安定した集団である。パルシアリダは固有の領土を持つが、政治的

に統合されておらず、指導者を欠いていた。しかし、同じパルシアリダに属する人々は、共通の出自を認識しており、始祖の名前にちなんだ集団名称を持っていた。彼らは同じ神々を崇拝し、共同で宗教儀式を執り行った。これらの特徴に基づき、本論ではパルシアリダを「民族」と呼ぶことにする。

最後に、ナシオンは同じ言語を話すパルシアリダの集合である。イエズス会員は、マモレ川上流のアラワク語系諸民族が一つのナシオンをなしていると考え、彼らを「モホ」と総称した[23]。宣教師はまた、彼らの領土の外部には、「カニチャナ canichana」、「モビマ movima」、「イトナマ itonama」、「カユババ cayubaba」、「バウレ baure」など、さまざまなナシオンがいることも知っていた。プエブロとパルシアリダがそれぞれ自称を持つのに対して、ナシオンは自称を持たない。このことは、先住民にとってナシオンが明確に認識された社会的範疇でなかったことを示唆している。

一七世紀末、イエズス会員はモヘーニョを説得し、彼らを四つの町に集住させた。すなわち、ロレト（一六八二年創設）、トリニダ（一六八七年創設）、サン・イグナシオ（一六八九年創設）、サン・ハビエル（一六九一年創設）である。集住化のとき、同じパルシアリダに属する人々はまとまって行動し、同じ町に身を落ち着けた。例えば、ロレトには、一三のパルシアリダが移住した。すなわち、カサボヨノ、ハピルコノ、シバケリョノ、トゥビラナ、上流のスベリョノ、タティルオノ、モウレモノ、下流のスベリョノ、マリキョノ、ボノペオノ、チャマイナノ、マネソノ、アラクレオノである。町の人口は約二三〇〇人に達した（図2）[24]。

創設当初、ミッションの町は雑多な民族の寄せ集めにすぎなかった。イエズス会員の報告書によれば、パルシアリダはそれぞれ「カピタン capitán」と呼ばれる指導者に従い[25]、町の中の異なる街区に住み、異なる畑を耕した（Beingolea 2007: 129-130）。同じ町に住んではいたが、パルシアリダは別々に行動したのである。宣教師の一人は、「離れていることが、これらの先住民の特徴の一つである。何事につけても、彼らはばらばらでいることが好きなのだ[26]」、と述べている。パルシアリダは別々に祈りを唱え、別々に聖歌を歌い、楽器を演奏した[27]。異なる民族の者は同

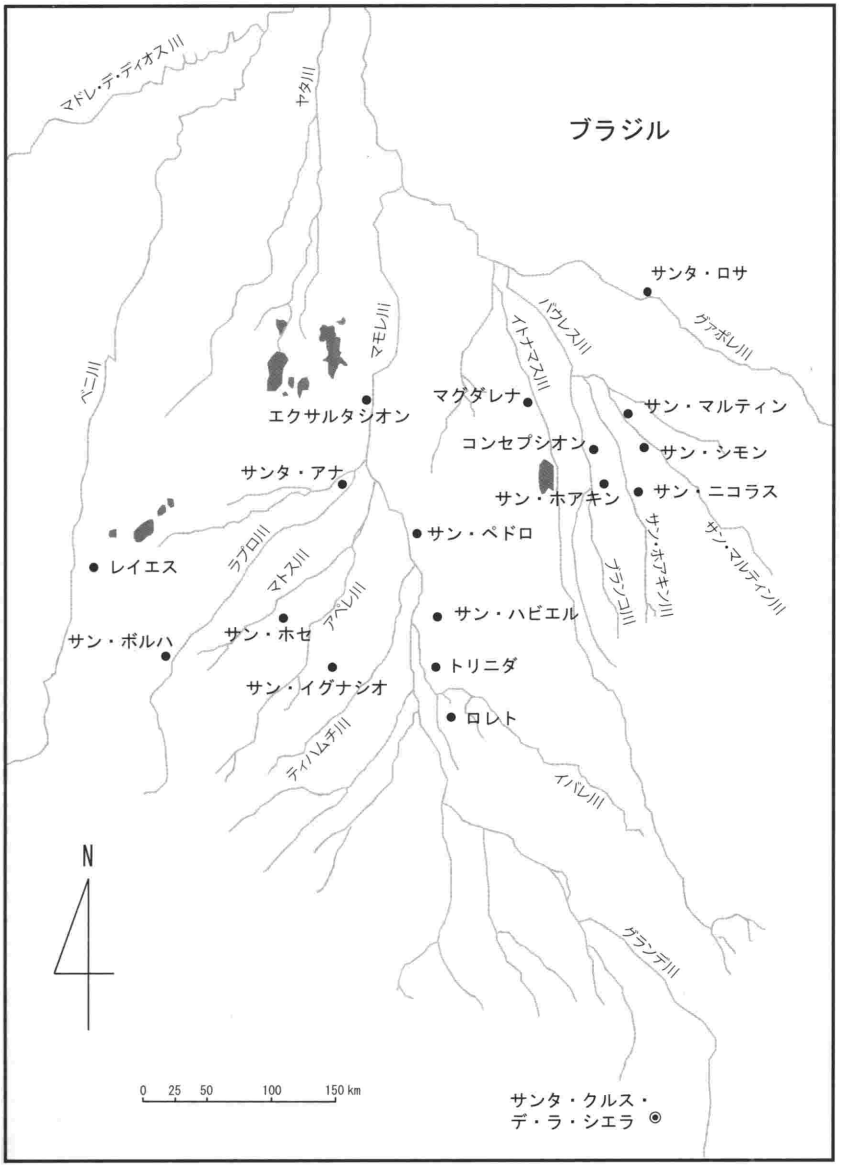

図2　モホス地方の主なレドゥクシオン

じ湖や川へ行くときでさえ異なる小道を使い、互いに出くわさないようにした。そのせいで、町の周囲には無数の小道が迷路のように張りめぐらされるはめになった。[28]

イエズス会員は町の各々に市参事会を組織し、アルカルデ、レヒドール、アルグワシルなどの役職を設置した。[29]しかし、この制度はすぐに民族間の根深い対立に巻き込まれることになった。というのも、先住民は異民族出身の役人の権威を承認することを拒んだのだから。宣教師の一人は、「自分たちに敵意があるとわかっている異民族の判事を、どうして受け入れることができようか。そんなことをすれば、町は戦場の地獄に変わってしまうだろう」(Eder 1985: 365)、と慨嘆している。

ドメスティコの台頭

それでは、この困難を克服するため、イエズス会員はいかなる措置を講じたのだろうか。いったいどうすれば、互いに反目する諸民族が和解して仲よく暮らすようになり、一つの共和国をなすに至るのだろうか。この問題に取り組んでいたとき、筆者は幸いロレトの町の洗礼簿の中に解決の鍵をみいだした。この洗礼簿には、一七〇一年から六六年までの洗礼記録が記載されている。[30]洗礼簿はいくつかのセクションに分かれ、それらはパルシアリダの一つ一つに対応している。例えば、「モウレモノ」という見出しの下には、このパルシアリダに生まれた幼児の洗礼記録が年代順に列挙されている。注目すべきことに、洗礼簿には一見してどのパルシアリダにも対応しないセクションがある。そこには、「ドメスティコ Domésticos」、または「家の者 De casa」という見出しがついている。

ドメスティコとは何者だろうか。名称が示すように、彼らはもともと宣教師の身の回りの世話をする未婚男性の使用人だった。聖堂に隣接する回廊上の建物には、宣教師と使用人の居住スペースがあった。そこにはまた、子供の教理学習の教室、さまざまな工房、診療所、貯蔵庫などもあった。建物全体は「コレヒオ colegio」、すなわち学院と呼ばれて

いた。[31] コレヒオに住む若者たちは、宣教師のために食事を作り、食卓で給仕した。若者たちはミサの侍者を務め、宣教師が病人を見舞うときには看護士として付き添った。彼らはまた、宣教師に現地語を教えた。他方、宣教師は使用人たちにヨーロッパの衣服を着せ、楽器の演奏を教え、専門職人に養成した。[32] 若者たちはやがて結婚し、コレヒオを出ていくが、その後も楽士、聖具室係、絵師、彫物師、織工、仕立職人、靴職人、大工、かじ職人、銀細工師、ろくろ師などとして、町のために働いた。職人たちには報酬として共有の畑の作物の一部が支給された。[33]

ロレトの洗礼簿で、ドメスティコの被洗礼者がパルシアリダの諸集団のそれとは別のセクションに記載されていることは、注目に値する。これは、ドメスティコがどのパルシアリダともメンバーシップが重ならない独立した集団だったことを意味するのだろうか。別のいい方をすれば、宣教師の使用人はコレヒオに入るとともに、そのエスニシティを放棄していたのだろうか。若者たちは、例えばアラクレオノであることをやめ、ドメスティコになったというのだろうか。筆者の考えでは、これこそが、イエズス会時代末期に起きたことである。ロレトの洗礼簿は、一七世紀初めにはドメスティコが民族を異にする人々の寄せ集めだったことを示している。洗礼簿には、洗礼を受ける幼児の両親がどの民族に属するかが明記されているのである。しかし、一七四〇年代以降、幼児の両親の民族帰属が記されることは稀になり、かわりに聖具室係やハープ奏者、大工、かじ職人、牛飼い、調理人など、父親の職業が書き込まれるようになった。おそらく、一七四〇年代までには、ドメスティコはパルシアリダの諸集団と肩を並べる独自の集団に変化していたのである。

いったい何ゆえ、宣教師の使用人は独自の集団をなすに至ったのだろうか。イエズス会到来以前のモホス地方では、女性と子供は戦争捕虜や贈り物としてパルシアリダの間でやりとりされていた（齋藤　二〇〇三）。彼らは人間の再生産のための貴重な資源とみなされ、婚姻や養子を通じて、受入先の集団に編入された。一六世紀中葉以降、スペイン人植民者は先住民のこの慣行を利用して、自分たちが経営するサトウキビ農園のための奴隷を確保しようとした。スペイ

ン人は鉄器をえさにしてパルシアリダ間の戦争をあおり、戦争捕虜を奴隷として購入した。一七世紀後半にモホス地方にやってきたイエズス会員も、基本的に同じ方法で使用人を確保しようとした。すなわち、宣教師の使用人は、先住民が鉄器と交換に彼らに売り払った戦争捕虜か、友好の証として彼らに提供した贈り物だったのである。[34] したがって、先住民の観点からすれば、宣教師に差し出された子供たちが、出身のパルシアリダから切り離され、いわば「神父のパルシアリダ」に編入されるのは、自然のなりゆきだった。

本論で筆者が提起したい仮説は、ドメスティコ集団こそ、ミッションの町の社会的統合の核として機能した、というものである。構造的には、ドメスティコは町全体の利益を代表する最良の位置にいた。集団として、彼らはパルシアリダ相互の反目から自由であり、個人としては、彼らはそれぞれ出身のパリシアリダと親族関係を保っていた。そのうえ、彼らは宣教師の親密な協力者であり、神父が先住民の間で享受した霊的威信の分け前に与っていたのである。

この点に関して、ロレトの洗礼簿は興味深い事実を明らかにしてくれる。すなわち、ドメスティコ集団の拡大である。洗礼を受けた幼児の数から、町を構成する諸集団の相対的な人口比率を知ることができる。洗礼簿に記録された最初のドメスティコの幼児の洗礼は一七一八年のものであり、当時ドメスティコ集団は町の人口の約二〇パーセントを占めていた。一七一八年から六六年にかけて、一年あたりのドメスティコの新生児の数は比較的安定している。しかし、パルシアリダの諸集団の新生児の数は著しく減少している。ミッションの人口は外部から補填されない限り伝染病などで減少するのが一般的なので、ドメスティコ人口の安定性は説明を要する。彼らが他集団と比べて著しく出生率が高かった、あるいは死亡率が低かったと想定する根拠は見当たらないので、これはおそらく、他集団の子供や、町の外部から連れてこられた非キリスト教徒の子供が、宣教師の使用人としてコレヒオに召し上げられたことによるのだろう。結果として、イエズス会時代末期には、ドメスティコは人口の四〇パーセント以上を占め、町で最大の集団となっていた。

イエズス会は一七六七年にスペイン王国全土から追放されるが、そのあとモホス地方にやってきた役人たちの記録では、ドメスティコは「貴族 nobles」として描かれている。記録によれば、専門職人は一般の農民よりも社会的地位が高く、経済的にも優遇されていた。パルシアリダの人々の間では、「召使い、または最下位の従者としてでもコレヒオに入りたいという野心と願望が熱烈である」(Carrasco 1832: 16)。他方、ドメスティコからパルシアリダへの降格は、最も厳しい処罰の一つとみなされていた。[35] イエズス会時代に両者の格差がこれほど大きかったかどうかは疑問の余地があるが、コレヒオに入ることが誰もが羨望する特権だったことは、間違いないだろう。

イエズス会追放後の変化

周知のように、イエズス会は一七六七年、国王カルロス三世の命令で、スペイン本国とその植民地から追放された。イエズス会の追放から一八二五年のボリビア共和国の独立までの半世紀は、筆者の考えでは、モホス地方の先住民共和国の創設にとってきわめて重要な時期である。なぜなら、この時期に、ロレタノ、トリニタリオなど、町を基盤とする新たなアイデンティティが出現するのだから。幸い、この時期はモホス地方の歴史を通じて史料が最も豊富な時期である。数多くの行政報告書や人口調査記録が、ミッションの町の複雑な社会構造に光を当ててくれる。[36]

記録によれば、町の住民は「ファミリア familia」と「プエブロ pueblo」と呼ばれる二つの階層に分かれていた。そして、ファミリアは貴族、プエブロは庶民に相当するとされていた。ファミリアは楽士、聖具室係、織工、大工、かじ職人などの職業組合に分かれ、町の共有の畑の作物の一部を支給されていた。他方、プエブロはパルシアリダに分かれていた。このファミリアは前述のドメスティコと同一の集団と思われる。

具体例を挙げよう。一八〇三年の人口調査によれば、サン・イグナシオの住民はファミリアとプエブロに分かれていた。ファミリアはさらに楽士、大工、織工、靴職人、かご職人、料理人、看護士、絵師、かじ職人、牛飼いという一〇

の職業組合に分かれており、人口は九三九人だった。他方、プエブロはカリヒリョノ、プヌボノ、コモボコノ、ムレ、カサベナノ、エリセボコノ、モビマという七つのパルシアリダに分かれ、人口は七二八人だった。また、一八〇六年の人口調査によれば、トリニダのファミリアは楽士、聖具室係、大工、ろくろ師、仕立職人、かじ職人、織工、牛飼いからなり、人口は九八九人だった。他方、プエブロはシヤボコノ、コホクレオノ、モユンコノ、タピムオノ、アペレオノ、アチュボコノ、チュチネオノ、タパクラノからなり、人口は八五四人だった。[37]

市参事会に目を転じてみよう。イエズス会追放後のスペイン人役人の報告書には、複数の役職が列挙されている。まず、町の各々に先住民の行政官がいた。「カシケ cacique」、「ゴベルナドール gobernador」、「コレヒドール corregidor」などさまざまな名称で呼ばれるこの町の指導者を、パルシアリダのカピタンと混同しないように注意しよう。一七世紀初めのイエズス会員の記録には、この役職は全く登場しない。一七五四年の匿名の報告書によれば、この役職はもともと、ペルー副王の命令で、敵対的な先住民への軍事遠征の司令官として設置されたという。[38] カシケ職は世襲ではなく、任期も不定期だった。前任者が解任されるか、引退するか、死去すれば、後任者が選ばれた。カシケには通常、一人か二人の「副官 teniente」が付き従った。さらに、公共の治安を維持するアルカルデ、監獄の収監者を監視するアルグアシル、町の住民のミサや教理の授業への出席を確保する「フィスカル fiscal」など、市参事会の通常の役職も存在していた。役職保持者は毎年選挙で選ばれた。[39]

従来の歴史記述では、イエズス会追放後の半世紀は、モホス地方の先住民にとって苦難の時代として描かれている。[40] スペイン人の「総督 gobernador」がモホス地方全体の長として任命され、地元出身の聖職者が空位となった町の司祭職を埋めるために派遣された。しかし、後者にはイエズス会員のかわりは務まらないことが、すぐに判明した。新任の司祭たちはその地位を利用して経済的利益を追求し、ポルトガル人との密貿易に励んだ。彼らは現地語を解さず、司牧の仕事を先住民の教理教師や聖具室係に押しつけた。植民地の中央政府はこの事態に危機感を抱き、一七八九年、改革

に着手した。司祭は世俗の事柄に介入することを禁じられ、町の各々に新たにスペイン人の「管理官 administrador」が派遣された。しかし、この改革がもたらしたのは、司祭と管理官の間の絶えざる権力闘争だけだった。こうした状況下、先住民は植民地当局への不信感を深め、抵抗の姿勢を強めていった。

一八〇一年、サン・ペドロの町のカシケであるフアン・マラサが、総督ミゲル・サモラ・イ・トレビーニョを追放したことで、先住民のスペイン人への抵抗は公然のものとなった。サン・ペドロはカニチャナの本拠地であり、モホス地方の首府だった。イエズス会ミッションの上長も、スペイン人総督もサン・ペドロに居を定めていた。一八〇一年の反乱の成功を受けて、マラサは自らモホス地方の総督を名乗り、もはやスペイン人役人を必要とせず、以後自分たちで統治を行うと宣言した[41]。マラサは後に新総督ペドロ・パブロ・デ・ウルキーホと和解するが、抵抗の気運は急速に他の町にも広がった。一八一〇年、トリニダの住民が蜂起した。彼らは町を訪れた総督ウルキーホを聖堂に軟禁し、彼の辞任を要求した。しかし今回は、サン・ペドロとサン・ハビエルの住民がスペイン人に味方し、総督を救い出した。翌年、彼らはマラサの指揮下、トリニダを襲撃し、反乱の主導者を捕縛し、町を略奪し、住民を虐待した。その結果、男性二七名、女性五名、一〇歳以下の子供三三名が殺害され、男性四六名、女性四名が致命傷を負った[42]。

もっとも、サン・ペドロのカシケとスペイン人役人の協力関係は長続きしなかった。一八二二年、理由は不明だが、当時の総督がマラサにカシケ職を退くよう求め、要求が拒否されると、横柄な先住民に侮辱されたと考えて、彼を拳銃で射殺した。サン・ペドロの住民は激しい暴力をもって応えた。総督が立てこもる役場を包囲し、火を放ったのである。総督は司祭の家に逃れようとしたが、途中で殺された。後に、スペイン人の軍隊がモホス地方に派遣され、反乱に与した先住民は処罰された。サン・ペドロの町は破壊され、首府はトリニダに移された[43]。

新しい世代の指導者

記録のうえでは、ロレタノ、トリニタリオなどの名称は、一九世紀初めの動乱についての証言の中に初めて登場する。問題は、誰がそれらを使い始めたか、ということである。筆者の考えでは、それは、スペイン語を話す若い世代の先住民である。イエズス会時代には、大多数の先住民がスペイン語を話せなかった。多民族が混在し、複数の言語が話される町では、宣教師は話者人口が最も大きい言語を学ぶように努めた。宣教師はまた、少数派言語の話者が多数派言語を学ぶことも奨励した。そのおかげで、イエズス会追放時には、多くの町で言語統一が達成されていた。しかし、それは同時に、深刻な言語的差異が町と町を隔てていることも意味していた（齋藤　二〇〇二; Saito 2005）。モホス地方の言語的多様性に直面したスペイン人役人は、当初スペイン語を解するごくわずかな先住民に依存していたが、やがて通訳を養成し始めた。一七八〇年代末、総督ラサロ・デ・リベラがサン・ペドロにスペイン語学校を設立し、通訳の養成に拍車がかかった。あちらこちらの町から少年たちが首府の学校に送り込まれ、スペイン語の読み書きを教わった。卒業後、少年たちは出身の町に戻り、スペイン人の管理官と司祭に通訳兼書記として仕えた。彼らはまた、町の子供たちにスペイン語を教えるよう求められた[44]。

あくまで仮説だが、ロレタノ、トリニタリオなどのアイデンティティが明確な表現を与えられたのは、サン・ペドロのこの学校においてではなかろうか。さまざまな町からやってきた、さまざまな言語を話す少年たちが、そこには集められた。こうした状況下、彼らはいやがおうでも町ごとの言語的差異に敏感にならざるをえなかっただろう。学校での彼らの共通語はスペイン語なので、彼らはごく自然にロレタノ、トリニタリオなどのスペイン語で互いに指示し合うようになったのではないか。故郷の町に戻ってから、彼らの幾人かは指導者となり、スペイン人に対する抵抗運動を推進するようになった。彼らは互いにスペイン語の手紙を書き送り、互いの企てに協力し合った。一例として、トリニダの

カシケがサン・ペドロのカシケに送った手紙を抜粋しよう。「私はトリニタリオに、カニシアナ〔カニチャナ〕を助けなさい、といっています。〔中略〕こちらでは、私はどんなことでも助ける覚悟でいます。心配は御無用です。ラウレタノ〔ロレタノ〕も同じです。手紙は既に発送されました。〔中略〕カヌーは三艘あり、二艘はハベリアノ、一艘はトリニタリオのです」[45]。

断片的な情報から、幾人かの先住民指導者のプロフィールが、素描程度ではあるが、浮かび上がってくる。ペドロ・イグナシオ・ムイバはトリニダの通訳であり、一八一〇年から一一年にかけての反乱の主導者である。「たいへんスペイン語が上手な先住民」として知られるムイバは、読み書きも堪能で、「手紙で一斉蜂起と従順の全面放棄を促していた」[46]。バルタサル・カユバはトリニダのもう一人の通訳で、ムイバの協力者である[47]。グレゴリオ・ゴンサレスはムイバの兄弟であり、反乱のときトリニダのカシケを務めていた。彼がフアン・マラサに宛てたスペイン語の手紙は、現在ボリビアの国立文書館に保管されている[48]。マヌエル・ムイバは一八〇二年、サン・ハビエルのカシケを務めており、不祥事をしでかした二人の先住民通訳を処罰せよ、という総督アントニオ・アルバレス・デ・ソトマヨールの命令を無視し、彼を武器で脅している[49]。エスタニスラオ・ティリラはロレトの通訳であり、一八〇一年の総督ミゲル・サモラの追放に倣って、着任したばかりのロレトのスペイン人管理官を追放しようとした[50]。

彼らはみなスペイン語を話し、幾人かは読み書きもできた。彼らはみな、少なくともいっときは、植民地当局への抵抗運動の最前線に立っていた。スペイン語を話す先住民は、故郷の町で急速に頭角を現し、幾人かはカシケの地位に昇りつめた。通訳兼書記として、彼らはスペイン人と先住民の仲介者という重要な役割を果たしており、おそらくそのことが、彼らが社会的階梯を異例の早さで昇り、高い地位につくことを可能にしたのだろう[51]。それにしても、スペイン人に協力する先住民を養成することを本来の目的とする学校が、彼らの最大の敵を生み出してしまったことは、なんとも皮肉である。総督ソトマヨールは、怒りにまかせて彼らをののしっている。「ラサロ・デ・リベラ殿の治世にこの首府

でスペイン語と読み書きの教育を受けた若者たちは、教育者として無能である。〔中略〕なぜなら、彼らはみな、故郷の町で最も堕落した連中なのだから」[52]。

筆者の考えでは、スペイン語を話すそれらの先住民は、故郷の町の人々が集団としてのアイデンティティを確立するうえで、決定的な役割を果たした。一九世紀初め、ドメスティコまたはファミリアは町の人口の約半数を占めており、社会的凝集の核となる潜勢力を持っていた。欠けていたのは、独自の集団であるという認識であり、その認識を裏書きする集団名称だった。スペイン語を話す先住民は、町の各々が言語的に独自であるという認識と、ロレタノ、トリニタリオなどの集団名称により、この欠損を埋めたのである。

モヘーニョの新たなアイデンティティが、強力な反スペイン感情、及び同じく強力な政治的自律の願望を背景として成立したことは、重要である。一八〇一年の総督サモラの追放の時点で、モホスにおけるスペイン人の統治は、先住民の目にはほとんど正当性を失っていた。イエズス会追放以来、三四年にわたる世俗統治の間、スペイン人役人は先住民を経済的発展に導くどころかその生存を脅かし、司祭はキリスト教的道徳を向上させるどころか堕落させた。カシケやカビルド役人が植民地当局に宛てた請願や陳情の数々が、モヘーニョが我慢の限界に達していたことを示している。筆者の考えでは、スペイン語を話す先住民は、こうした不満を政治運動の動力に変えるという重要な役割を果たしたのである。スペイン語を理解するゆえ、外部世界の情報を摂取できる彼らは、おそらく一八世紀末にアンデス全土を震撼させた先住民反乱について知っていたのだろう。スペイン人の統治の正当性の全面否定、自治の要求、いまこそ行動すべきという認識など、アンデスの先住民とモヘーニョの政治理念には共通の特徴が認められる。

一例を挙げよう。総督サモラの追放後、フアン・マラサはモホス全土に口頭で、そして書面でメッセージを送り、「もはや別の時代であり、国王もいなければ、裁判所も他の上級審もなく、いっさいはまやかしである。命令するのは彼〔マラサ〕のみであり、彼に従わなければならない」[53]、と宣言した。サン・ペドロのカシケのこの宣言は、一七九五

年に現在のボリビア、ラパス県のヘスス・デ・マチャカの先住民が蜂起したとき、指導者の一人が発した言葉と似ている。「いまはもはや別の時代であり、カシケと補佐役、そして司祭は首をすげ替え、コムンが望む人物を据えなければならない」(Thomson 2002: 145; Thomson 2005: 49)。

ペドロ・イグナシオ・ムイバが主導した一八一〇年から一一年にかけてのトリニダの反乱は、植民地全体の政治動向のみならず、世界史上の出来事とも連動していた。一九世紀の最初の一〇年は、ナポレオン・ボナパルトが率いるフランス軍がスペインに侵攻し、アメリカ生まれのスペイン人がその機をとらえて植民地の権力を掌握したときだった。そして、モホス地方の先住民指導者たちは、そのことを知らないわけではなかった。一八一〇年、トリニダのカシケであるグレゴリオ・ゴンサレスは、フアン・マラサに手紙を送り、こう述べている。「我々の国王はフランスで死にました。殺されたのです。そして、かつて国王がいた宮殿には、ボイナパルテ Boinaparte がいます。スペインは負け、すべてはフランス人のものになりました。それでも彼ら〔スペイン人役人〕は、我々をだまし、問題ないと信じ込ませています。しかし、何もかもうそなのです」[54]。

スペイン領アメリカのいずこでも、ナポレオンによる国王フェルナンド七世の強制的退位は、独立運動の引き金になった。モホス地方もこの点では例外でなかった。もっとも、モホス地方で模索されたのは、アメリカ生まれのスペイン人のイベリア半島出身者からの独立ではなく、ロレタノ、トリニタリオなどのスペインからの独立だった。一八一〇年、総督ウルキーホがトリニタリオの反抗的態度をとがめ、スペイン国王に報告すると脅したとき、彼らは、「私〔ウルキーホ〕はうそつきであり、国王はもはやおらず、死んでしまった」[55]と応じたという。トリニタリオにとって、スペインにおけるブルボン王朝の終焉は、モホスにおけるスペイン支配の終焉を意味し、彼らの政治的自律の要求を正当化するものだったのである。

モヘーニョの独立運動は最終的に失敗に終わるが、その原因は何だったのだろうか。筆者の考えでは、先住民の政治

活動の当初の成功が、その失敗の条件を整えたのである。スペイン語を話す先住民は、ロレタノ、トリニタリオなどの新たな共同性を作り上げることに成功し、その共同性は彼らの独立運動の基盤となった。しかし、モヘーニョの新たなアイデンティティは、スペイン人との対立に基づくのみならず、彼ら同士の対立にも基づいていた。それゆえ、彼らは共通の敵に対して共同戦線を張ることができなかったのである。

事実、時おりの協力の呼びかけを除けば、町々の政治活動は足並みがそろっていなかった。一八〇一年のサン・ペドロのカシケの大胆な行動により、先住民の自治の願望は突如、現実になった。マラサはモホス地方の事実上の支配者となり、「この地方全土で、首府のカシケ、ファン・マラサの声または名前以外が耳にされることはない」[56]、とまでいわれるようになった。しかし、実際には、マラサの声はモホスで耳にされる唯一のものではなかった。他の町の指導者もまた、それぞれ最高権力者を自称し始めたのである。トリニダでは、ペドロ・イグナシオ・ムイバが、「この地方を治めるのは私、ペドロ・イグナシオ・ムイバであり、私が町々を立て直すのだ」[57]と公言していた。ムイバはまた、町の同胞たちに、「カニシアナ〔カニチャナ〕をけしかけて〔総督〕サモラをこの地方から追放したのは私なのだ。ここでは、私が望むこと以外は起こらないのだ」[58]と告げていた。ロレトでは、カシケのホセ・ボピが絶対君主を自称していた。「私は誰も恐れない。勇猛で、しかも自分の町にいるのだから。私以外の誰も命令を発してはならない。私は強いカシケで、管理官で、総督でもあるのだ」[59]。確かにマラサ自身はたいへん尊敬されていたが、「この地方全土がカニシアナ〔カニチャナ〕民族に従わねばならない」[60]という彼の要求には、他の町の指導者から異議が唱えられた。既にみたように、この政治的細分化は、総督ウルキーホがマラサを味方につけ、一八一一年にトリニダの反乱を鎮圧させるという不幸な事態を招くことになった。

結　論

本論では、モホス地方における先住民共和国の成立過程を、相補的な二つの視点から考察した。一つは地域に焦点を絞る視点、もう一つは植民地全体に視野を広げる視点である。モホスにおける民族生成の歴史は、当然のことながら、地域的特徴を示している。筆者の考えでは、最も顕著な特徴はエスニシティと言語の密接な結びつきであり、これはアンデス高地にはみられないものである。植民地時代、アンデスの先住民の大多数はケチュア語かアイマラ語を話したが、アマゾン低地では言語的多様性ははるかに大きかった。前述のように、モホス地方では町の言語統一が民族生成に先立ち、その下準備をしたと考えられる。その結果、ロレタノ、トリニタリオなどにとって、言語はアイデンティティの本質的要素となった。一九世紀中葉以降、町の住民が分散しても、彼らが集団としての同一性を維持できた理由の一つは、おそらくここにある。今日トリニタリオは、トリニダだけでなく、サン・ロレンソやサン・フランシスコ、その他の集落にも暮らしている。しかし、こうした地理的分散にもかかわらず、彼らはみなトリニタリオ方言を話し、トリニダを故郷とみなし、聖三位一体の祭日を祝い続けているのである。

モヘーニョの言語統一と民族生成は、さかのぼれば、イエズス会が実施した集住化政策を発端としている。とはいえ、宣教師はこの点で、スペインの植民地化事業の地域的媒介者の役割を果たしたにすぎない。モヘーニョの歴史は、スペイン領南米における先住民共和国の創設というより包括的なプロセスの一部をなしているのである。植民地時代末期、アンデスでもアマゾンでも、在来の民族集団は消滅し、その灰の中から新たな社会形態が姿を現した。植民地各地で個別に進んだこのプロセスに、顕著な均一性をもたらしたのは、スペインの画一的な対先住民政策である。個々の先住民社会がたどった歴史的軌跡は多様だが、その到達点はどこでもほぼ似通っているのである。

本論におけるモヘーニョの歴史の検討から得られる教訓があるとすれば、それは、イエズス会ミッションを、スペイ

ンの植民地化事業と対立するものとしてだけでなく、連動したものとしても研究すべきである、ということだろう。従来の歴史研究は、しばしばミッションを俗世から隔離された楽園のように描き、先住民共和国のいくつかの特徴を誤って宣教師の発案に帰していた。しかし、実際にはイエズス会は、行政府が植民地の中核地域で実施した政策を辺境地域に適用しており、その帰結も中核地域のそれと似通っているのである。イエズス会の方針と行政府の政策とのこの一致は、スペイン領アメリカに特徴的なものなのだろうか。おそらくそうだろう。なぜなら、植民地では聖職者の活動は王室の厳格な統制下に置かれていたのだから。もっとも、この問いに的確に答えるためには、より視野の広い比較研究が必要である。近年、イエズス会の世界規模の活動に対する学術的関心が高まっており、野心的な比較研究に取り組む機運は熟しているといえよう。[61]

謝　辞

本論は既刊の英語論文（Saito　2007）に基づいている。翻訳といえるほど原文に忠実ではないが、内容は基本的に同じである。再録を許可してくれた国立民族学博物館に感謝する。

本論の基礎となった史料の収集と検討は、以下の助成を得て行われた。

国立民族学博物館、平成一五年度外国調査旅費（在外研究員等旅費）。

日本学術振興会、平成一七～一八年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「南米カトリック・ミッションの宗教的実践における文書の媒介作用の歴史人類学的研究」（課題番号：17520566）。

本論の最初の草稿は、平成一七年一二月一八日に上智大学で開催された国際学術会議で読み上げられた。この会議に筆者を招いてくれた川村信三氏、コメントをくれた安村直己氏に感謝したい。

注

1 今日のボリビアの先住民共同体に関しては、以下の民族誌研究が征服以前の過去と現在を連結することにおおむね成功している。Abercrombie 1998; Rasnake 1988; Saignes 1985; Saignes 1990; Wachtel 1990.

2 Wachtel 1992: 39. 同様の見解としては、Penry 1996: 2, 5; Thomson 2002: ix を参照せよ。

3 モホス地方のイエズス会ミッションの歴史については、以下を参照せよ。Barnadas 1985; Block 1994: 33-124; Chávez Suárez 1986: 187-312; Vargas Ugarte 1964.

4 現代のモヘーニョの社会と文化については、以下を参照せよ。Díez Astete & Murillo 1998: 147-157; Jones 1980; Riester 1976: 309-339; Saito 2004.

5 筆者の調査時、すべての男性と大多数の女性がスペイン語を話した。彼ら固有の言語による名乗りは「トリンラノノ trinranono」（トリニタリオ方言）、「イナシァヌァナ inasianuana」（イグナシアノ方言）などであり、スペイン語の名乗りから派生している。なお、一九九四年から九五年にかけて行われた国勢調査の暫定報告書によれば、先住民の人口は以下のとおり。トリニタリオ九八一三人、イグナシアノ六三一七人、ハベリアノ四一〇人（Bolivia 1995: 755）。ロレタノは、集団としては二〇世紀末に消滅している。

6 トリニタリオ方言については Gill 1993; Gill n.d.、イグナシアノ方言については Olza Zubiri, Nuni de Chapi & Tube 2004; Ott & Burk de Ott 1983 を参照せよ。Becerra Casanovas 1980 は四つの方言を比較した唯一の研究だが、間違いだらけで役に立たない。なお、筆者はモホ語の四つの異形が言語ではなく方言であるという指摘を Rose n.d. に負っている。

7 ボリビア高地では、「ユラ yura」（Rasnake 1988）、「クルタ k'ulta」（Abercrombie 1986; Abercrombie 1998）、「チパヤ chipaya」（Wachtel 1990; ワシュテル 1997）などの例が挙げられる。

8 Cushner 1980; Cushner 1982; Cushner 1983; Mörner 1968; Mörner 1970を参照せよ。

9 スペイン領南米における集住化政策については、以下を参照せよ。Coello de la Rosa 2001: 137-245; Duviols 1972: 248-263; Fraser 1990: 40-47, 75-79; Málaga Medina 1972; Málaga Medina 1974a; Málaga Medina 1974b; Málaga Medina 1975; Málaga

Medina 1979; Málaga Medina 1993; Sordo 1995; Sordo 2000: 66-122; Spalding 1984: 178-180, 214-216, 225-226; Wightman 1990: 9-44。基本的な既刊史料は Cook 1975; Lohmann Villena & Sarabia Viejo 1986-1989 である。

10 アレハンドロ・マラガ・メディーナによれば、副王トレドの治世には、約一五〇万もの人々が一千以上の町に集住させられた。Málaga Medina 1974b: 836; Málaga Medina 1993: 299 を参照せよ。

11 ボリビア高地の歴史人類学的研究では、エリザベス・ペンリーがこの見解を最も強く打ち出している（Penry 1996）。彼女によれば、「一八世紀末までには、［中略］集合的な「インディオ」のアイデンティティと新しい正当な権力機構が、スペイン人が先住民を押し込めたレドゥクシオンの混交的な世俗的・宗教的制度を通じて形成された」（Penry 1996: 2）。

12 アンデス地域を専門とする歴史学者は、征服以前の先住民の分散型居住パターンを強調し、レドゥクシオンをあたかもゼロから造られたかのごとく扱う傾向にある（Rasnake 1988: 118; Spalding 1984: 17-20, 43-44）。しかし、少なくとも南アンデスでは、レドゥクシオンの多くは既存の先住民の町を造り直したものだった。Lohmann Villena & Sarabia Viejo 1986/I: 119 をみよ。具体例としては、ティティカカ湖南西のアイマラ語系民族「ルパカ lupaqa」の町が挙げられる（Murra 2002: 183-207; Wachtel 1990: 417）。

13 先住民の町の市参事会については、以下を参照せよ。Abercrombie 1998: 244-246; Penry 1996: 36-39; Spalding 1984: 216-219; Thomson 2002: 44-54.

14 今日まで存続しているレドゥクシオンの比率について、研究者が利用できる統計はないに等しい。一九七〇年代、ダニエル・ゲイドとマリオ・エスコバルは、ペルーのクスコ県南西で副王トレドの治世に創設されたレドゥクシオンの約七〇パーセントが存続していると報告している（Gade & Escobar 1982: 446）。

15 レドゥクシオンのアネホとエスタンシアについては、以下を参照せよ。Abercrombie 1998: 272-278, 283-284; Penry 1996: 28-34; Platt 1987; Saignes 1991: 92, 108; Wachtel 1990: 30-35.

16 研究者の間では、「レドゥクシオン」、「ドクトリーナ」、「ミッション」の共通点と相違点をめぐって混乱がみられる。「レドゥクシオン」という言葉が一七世紀以降、おもに「ミッション」を意味するようになったことが、この混乱を助長している。正しい分類は、例えば Málaga Medina 1975: 9-13; Palomera Serreinat 2002: 140-143 にみいだされる。

17 植民地時代後期、宣教師はしばしば世俗の役人の権限を侵害したかどで非難されている。Eder 1985: 363-366 をみよ。

18 「ユートピア」という言葉の使用は、例えば Bareiro Saguier 1995; Marzal 1992-1994; Melià 1995: Reiter 1995 にみられる。幸い、この語を字義どおりの意味でミッションに当てはめる研究者は少なくなっている。

19 征服以前のアイマラ語系諸民族の政体を指すのに、研究者はさまざまな言葉を明確な定義なしに用いてきた。例えば、diarchy (Abercrombie 1998)、señorío (Bouysse-Cassagne 1978; Bouysse-Cassagne 1987)、nación (Julien 1983)、kingdom (Klein 2003; Lumbreras 1974)、reino (Murra 2002)、chefferie (Wachtel 1990) などである。本論では、それらの政体の人口規模が比較的大きいこと（例えばルパカの人口は一〇万人を数えた）、インカによる征服後もかなりの自律を享受したことを考慮して、「王国」という言葉を使う。

20 この先住民反乱については、Penry 1996; Serulnikov 2003; Thomson 2002; Thomson 2005 を参照せよ。

21 基本的な史料は以下のとおり。Carta de los PP. que residen en la misión de los moxos para el P. Hernando Cavero de la Compañía de Jesús provincial de esta provincia del Perú en que se le da noticia de lo que han visto oído, y experimentado en el tiempo que ha que están en ella, provincia de los moxos, 20/IV/1676, ARSI, Perú 20, ff. 200r-213v; Copia de la relación de los PP. de la misión de los infieles mojos, pueblo nuevo de los moxos, 12/VII/1679, ARSI, Perú 20, ff. 228r-230r; Castillo 1906. また、Block 1994: 19-22; Tormo Sanz 1972 も参照せよ。

22 同じモホス地方のモビマとバウレの間では、首長の地位は世襲だった。以下を参照せよ。Descripción de los mojos que están a cargo de la Compañía de Jesús en la provincia del Perú, año de 1754, APTCJ, leg. 3, no. 7, f. 7v; Eder 1985: 84-85.

23 この言葉の語源は不明である。筆者の知る限り、それはインカ帝国の結縄管理官 quipocamayo が一五四二年、クリストバル・バカ・デ・カストロに行った供述に最初に現れる（Jiménez de la Espada 1920: 19）。後にそれは、スペイン人征服者がアマゾン低地に発見しようとした金銀豊かな王国の伝承と結びつけられた。Chávez Suárez 1986: 3-4; García Recio 1988: 26-33 を参照せよ。

24 Copia de la relación de los PP., pueblo nuevo de los moxos, 12/VII/1679, ARSI, Perú 20, ff. 228r-229v; Carta del P. Antonio de Orellana al P. Provincial Martín de Xáuregui, Loreto, 18/X/1687, ARSI, Perú 17, f. 107r; Libro de bautismo de la reducción de

Nuestra Señora de Loreto, 1701-1766, APBCJ, MM, no. 0039.

25 Relación de las misiones de la Compañía de Jesús en la provincia del Perú el año de 1713, ARSI, Perú 21, f. 179r; Breve noticia del estado en que se hallan el año de 1713 las misiones de infieles, que tiene a su cargo la provincia del Perú de la Compañía de Jesús en las provincias de los mojos, AHLP, LB-329, f. 10r。集住化以前のパルシアリダには政治的指導者がいなかったのだから、「カピタン」は集住化の産物である。おそらく、同じパルシアリダに属するプエブロの首長の中で、集住化のとき指導力を発揮した者が「カピタン」に収まったのだろう。

26 Descripción de los mojos, año de 1754, APTCJ, leg. 3, no. 7, f. 5r.

27 Relación auténtica del Fr. Francisco de Torres del Orden de Predicadores sobre el estado de las misiones de Mojos, Lima, 14/I/1698, ARSI, Perú 21, f. 113v; Relación de la misión apostólica de los moxos en esta provincia del Perú de la Compañía de Jesús que remite su Provincial P. Diego de Eguiluz a N. M. R. P. Thyrso González General, año de 1696, ARSI, Perú 21, ff. 58v, 63r; Eder 1985: 285-287, 298.

28 Descripción de los mojos, año de 1754, APTCJ, leg. 3, no. 7, f. 5r.

29 イエズス会時代の市参事会については、以下を参照せよ。Relación de las misiones de la Compañía de Jesús el año de 1713, ARSI, Perú 21, ff. 179r-179v; Breve noticia del estado en que se hallan el año de 1713 las misiones de infieles, AHLP, LB-329, ff. 10r-10v; Descripción de los mojos, año de 1754, APTCJ, leg. 3, no. 7, f. 19r; Altamirano 1979: 94; Beingolea 2007: 129; Eder 1985: 362; Orellana 1755: 108-109.

30 Libro de bautismo de Loreto, 1701-1766, APBCJ, MM, no. 0039. 同じ文書館には、一六八二年から一七〇〇年までの記録が記載されたもう一冊の洗礼簿が保管されていた。バルガス・ウガルテがそれに言及している（Vargas Ugarte 1964: 29）。この洗礼簿は残念ながら紛失してしまった。

31 コレヒオの建物の構造については、以下を参照せよ。Carta del Padre Misionero Agustín Zapata al Padre Fernando Tardio dándole cuenta del estreno de la iglesia, y de la visita a los canisianas, San Javier, 25/IX/1693, AHLP, LB-267, ff. 1r-1v; Altamirano 1979: 99.

32 宣教師の使用人については、以下を参照せよ。Relación de las misiones de la Compañía de Jesús el año de 1713, ARSI, Perú 21, ff. 177v, 178v; Altamirano 1979: 97-98; Eder 1985: 303; Mayer 1970: 246; Mayer 1972: 373.

33 専門職人については、以下を参照せよ。Relación de las misiones de la Compañía de Jesús el año de 1713, ARSI, Perú 21, ff. 178v-179r; Descripción de los mojos, año de 1754, APTCJ, leg. 3, no. 7, ff. 19r-19v; Altamirano 1979: 99, 221; Eder 1985: 319-325; Mayer 1972: 373; Orellana 1755: 109.

34 Carta del Padre Misionero Agustín Zapata al Padre Fernando Tardío, San Javier, 25/IX/1693, AHLP, LB-267, f. 2r; Relación de la misión apostólica de los moxos, año de 1696, ARSI, Perú 21, f. 50r; Eder 1985: 135.

35 Copia de la relación que comprende las noticias generales y particulares de la situación actual de la provincia de Moxos, escrita por el gobernador Lázaro de Ribera, San Pedro, 24/IX/1792, AGNA, Sala IX, 7-7-2, f. 6r.

36 イエズス会追放後の町の社会構造については、以下を参照せよ。Descripción de algunas provincias y obispados de América por el Dr. Cosme Bueno, catedrático de prime de matemática y cosmógrafo mayor de estos reynos, año de 1771, RAH, 9/5907, f. 96v; Copia de la relación escrita por el gobernador Lázaro de Ribera, San Pedro, 24/IX/1792, AGNA, Sala IX, 7-7-2, ff. 5v-7r; Carrasco 1832: 16; D'Orbigny 1844/III: 230-231. また、APBCJ の MM には多くの人口調査記録が保管されている。

37 Padrón general del pueblo de San Ignacio formado en este presente año de 1803, San Ignacio, 12/V/1803, APBCJ, MM-0192; Padrón de la gente que compone este pueblo de la Santísima Trinidad de Moxos, Trinidad, 16/V/1806, APBCJ, MM-0193.

38 Descripción de los mojos, año de 1754, APTCJ, leg. 3, no. 7, f. 19r.

39 イエズス会追放後の町の役職については、以下を参照せよ。Descripción de algunas provincias y obispados de América, año de 1771, RAH, 9/5907, f. 96r; Decreto real al obispo de Santa Cruz de la Sierra, sobre el nuevo gobierno espiritual y temporal de las misiones de indios chiquitos y moxos, en aquella provincia, San Ildefonso, 15/IX/1772, BL, 4745. f. 9.(28.), pp. 39-41; Copia de la relación escrita por el gobernador Lázaro de Ribera, San Pedro, 24/IX/1792, AGNA, Sala IX, 7-7-2, ff. 5v-7r; Carrasco 1832: 16; D'Orbigny 1844/III: 230-231.

40 イエズス会追放後のスペインによるモホス地方の世俗統治については、以下の研究がある。Block 1994: 125-148; Carvalho

Urey 1976; Chávez Suárez 1986: 339-499; Parejas Moreno 1976; René-Moreno 1974: 11-85; Roca 1992.

41 Declaraciones de los administradores de los pueblos de Exaltación, San Javier, Trinidad y Loreto sobre el estado de la provincia de Moxos, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, ff. 264v, 269r.

42 反乱鎮圧後、総督ウルキーホは二度にわたって中央政府に報告書を提出した。そこには、総督自身やスペイン人管理官、司祭、カシケの書簡や証言が含まれている。ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII を参照せよ。

43 一八二二年の事件については、以下を参照せよ。Carta de los curas de San Pedro al vicario juez eclesiástico Felipe Santiago Cortéz y otra de José de Mendizabal é Imas al mismo vicario sobre los conflictos entre el gobernador y el pueblo de San Pedro, San Pedro, 28/IV/1822 y Cochabamba, 3/VI/1822, APBCJ, MM-0060; D'Orbigny 1844/III: 133, 235.

44 先住民通訳の養成については、以下を参照せよ。Informe del gobernador Lázaro de Ribera sobre el desastroso estado en que se encuentra su provincia y los medios que él considera oportunos para remediarlo, San Pedro, 22/II/1788 & 15/IV/1788, RAH, Mata Linares, 9/1664, ff. 546r, 561r-561v, 562r-562v; Copia de la relación escrita por el gobernador Lázaro de Ribera, San Pedro, 24/IX/1792, AGNA, Sala IX, 7-7-2, ff. 7v-9r.

45 Copia de la carta escrita por el cacique de Trinidad Gregorio González al de San Pedro, 1/X/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 436r.

46 Representación hecha al gobernador Lázaro de Ribera por el cacique y demás jueces del pueblo de Trinidad, manifestando los escándalos que comete su cura Ramón Lairana, San Pedro, 7/XI/1786, ABNB, AM-GRM, v. 8, no. XII, ff. 193r-195; Informe de los curas primero y segundo del pueblo de Loreto contra el indio trinitario Pedro Ignacio Muiba, Loreto, 31/XII/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 374r; Declaraciones de los administradores, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, f. 264r. Carvalho Urey 1976; Roca 1992 はムイバをカシケとみなしているが、実際には彼は、カシケ職はもとより、カビルドのいかなる役職も担ったことがない。

47 Informe del gobernador interino Antonio Alvarez de Sotomayor sobre las ocurrencias habidas entre los pueblos de Trinidad y San Javier, San Pedro, 24/XI/1804, ABNB, AM-GRM, v. 17, no. XVIII, ff. 170v-171r.

48 Copia de la carta del secretario de gobierno Lucas José de González al gobernador Pedro Pablo de Urquijo sobre los acontecimientos del pueblo de Trinidad, Trinidad, 17/I/1811, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 435v; Copia de la carta escrita por Gregorio González, cacique de Trinidad al de San Pedro, 11/XI/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 439r; Informe del gobernador Pedro Pablo de Urquijo sobre el alzamiento de los naturales del pueblo de Trinidad, San Pedro, 4/IV/1811, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 449r. ゴンサレスの手紙は ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, ff. 436r, 437r, 438r-438v, 439r, 440r-440v にある。これらの手紙は Carvalho Urey 1976; Roca 1992 で刊行されている。

49 Informe del gobernador interino Antonio Alvarez de Sotomayor sobre el estado de la provincia, San Pedro, 29/XI/1802, ABNB, AM-GRM, v. 17, no. IV, ff. 40v-41v; Informe del gobernador interino Antonio Alvarez de Sotomayor, San Pedro, 24/XI/1804, ABNB, AM-GRM, v. 17, no. XVIII, ff. 175v-176r; Declaraciones de los administradores, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, f. 265r.

50 Declaraciones de los administradores, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, ff. 264v, 267r; Copia del oficio de los curas primero y segundo de Loreto al gobernador Pedro Pablo de Urquijo, Loreto, 15/XII/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, ff. 361r-361v.

51 もっとも、若い世代の急進な合頭は、しばしば彼らと町の長老との間に軋轢を引き起こしたようである。Informe del gobernador interino Antonio Alvarez de Sotomayor, San Pedro, 24/XI/1804, ABNB, AM-GRM, v. 17, no. XVIII, ff. 175v-176r.

52 Informe del gobernador interino Antonio Alvarez de Sotomayor sobre el mal estado de las escuelas de primeras letras y de las de dibujo por falta de textos y útiles, y sobre lo abandonado que está por los curas el aprendizaje de la doctrina cristiana, a causa de haber todos contraído la costumbre de delegar esta enseñanza a indios doctrineros, y de no pensar en ello ni aun a tiempo de administrar los sacramentos, San Pedro, 16/VII/1804, ABNB, AM-GRM, v. 17, no. X, f. 107v.

53 Declaraciones de los administradores, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, f. 264v.

54 Copia de la carta escrita por el cacique de Trinidad Gregorio González, al de la capital Juan Maraza, 6/X/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 440r.

55　Informe del gobernador Pedro Pablo de Urquijo sobre el alzamiento de los naturales del pueblo de Trinidad, San Pedro, 9/II/1811, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 347v.

56　Declaraciones de los administradores, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, f. 265r.

57　Copia del oficio del administrador de Loreto al gobernador Pedro Pablo de Urquijo, Loreto, 26/XII/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 376r.

58　Informe del gobernador interino Antonio Alvarez de Sotomayor, San Pedro, 24/XI/1804, ABNB, AM-GRM, v. 17, no. XVIII, f. 171r.

59　Oficio del administrador de Loreto al gobernador Pedro Pablo de Urquijo, Loreto, 15/XII/1810, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXVIII, f. 358r.

60　Declaraciones de los administradores, San Pedro, 5/II/1806, ABNB, AM-GRM, v. 18, no. XXXII, f. 269r.

61　グローバルな視点に立つイエズス会の比較史的研究としては、O'Malley et al. 1999; O'Malley et al. 2006 がある。

参考文献

1　未刊史料

Archivo y Biblioteca Nacionales de Bolivia, Sucre (ABNB)
　Archivo de Mojos, Colección Gabriel René-Moreno (AM-GRM)
Archivo General de la Nación, Buenos Aires (AGNA)
　Fondo Gobierno Colonial
Archivo Histórico y de Límites del Perú, Lima (AHLP)
　Límites con Bolivia (LB)

Archivo de la Provincia Boliviana de la Compañía de Jesús, La Paz (APBCJ)
Misiones de Mojos (MM)
Archivo de la Provincia Toledana de la Compañía de Jesús, Alcalá de Henares (APTCJ)
Archivum Romanum Societatis Iesu, Roma (ARSI)
Provincia Peruana
British Library, London (BL)
Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid (RAH)
Colección Mata Linares

2　既刊史料

Altamirano, Diego Francisco
1979 *Historia de la misión de los mójos.* La Paz: Instituto Boliviano de Cultura.
Beingolea, Juan de
2007 Relación del estado de las misiones de Mojos escrita por el Padre Juan de Beingolea S.J. 1768. In Javier Reynaldo Lozano Yalico & Joan Manuel Morales Cama, *Poblando el cielo de almas. Las misiones de Mojos: Fuentes documentales* (*siglo XVIII*), pp. 121-134. Lima: Javier Reynaldo Lozano Yalico & Joan Manuel Morales Cama.
Carrasco, José Matías
1832 *Descripción sinóptica de Mojos.* Cochabamba.
Castillo, Joseph de
1906 Relación de la provincia de Mojos. In Manuel V. Ballivián (ed.) *Documentos para la historia geográfica de la república de Bolivia*, v. 1, pp. 294-395. La Paz: J. M. Gamarra.

Cook, Noble David (ed.)

1975 *Tasa de la visita general de Francisco de Toledo.* Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

D'Orbigny, Alcide

1835-1847 *Voyage dans l'Amérique méridionale*. 9 vols. Paris: P. Bertrand & Strasbourg: V. Levrault.

Eder, Francisco Javier

1985 *Breve descripción de las reducciones de Mojos, ca. 1772*. Cochabamba: Historia Boliviana.

Jiménez de la Espada, Marcos (ed.)

1920 Discurso sobre la decendencia y gobierno de los incas. In Horacio H. Urteaga (ed.) *Informaciones sobre el antiguo Perú* (Colección de libros y documentos referentes a la historia del Perú, ser. 2, v. 3), pp. 3-53. Lima: Imprenta y Librería Sanmartí y Ca.

Lohmann Villena, Guillermo & María Justina Sarabia Viejo (eds.)

1986-1989 *Francisco de Toledo: Disposiciones gubernativas para el virreinato del Perú*. 2 vols. Sevilla: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

Matthei, Mauro (ed.)

1969-1972 *Cartas e informes de misioneros jesuitas extranjeros en Hispanoamérica: Selección, traducción y notas*. 3 vols. Santiago: Universidad Católica de Chile.

Mayer, Domingo

1970 Carta del P. Domingo Mayr, misionero de la provincia de Alemania del Sur, a su provincial, escrita en la reducción de la Inmaculada Concepción de María de los bauros, país de los mojos, el 31 de diciembre de 1719. In Mauro Matthei (ed.) v. 2, pp. 242-247.

1972 Carta del P. Domingo Mayer S.J. traducida del latín al alemán, a su provincial, escrita en la reducción de la Inmaculada Concepción de los baures o mojos, el 20 de julio de 1727. In Mauro Matthei (ed.) v. 3, pp. 365-374.

Orellana, Antonio de

1755 Relación abreviada de la vida, y muerte del Padre Cipriano Barraza, de la Compañía de Jesús, fundador de la misión de los moxos en el Perú. In *Cartas edificantes, y curiosas, escritas de las missiones estrangeras, y de Levante por algunos missioneros de la Compañía de Jesús*, v. 9, pp. 93-122. Madrid: Imprenta de la Viuda de Manuel Fernández.

3　研究書・論文

Abercrombie, Thomas

1986 The Politics of Sacrifice: An Aymara Cosmology in Action. Ph.D. dissertation. The University of Chicago.

1998 *Pathways of Memory and Power: Ethnography and History among an Andean People.* Madison, WI: The University of Wisconsin Press.

Armani, Alberto

1982 *Ciudad de Dios y ciudad del sol: El "Estado" jesuita de los guaraníes (1609-1768)*. Marcos Lara (trans.) México: Fondo de Cultura Económica.

Bareiro Saguier, Ruben

1995 Chemins d'utopie. In Philippe Sollers (ed.) *Baroque du Paraguay*, pp. 32-61. Paris: Éditions Hoëbeke & Musée-Galerie de la Seita.

Barnadas, Josep M.

1985 Introducción. In Francisco Javier Eder, pp. III-CIV.

Becerra Casanovas, Roger

1980 *De ayer y de hoy: Diccionario del idioma moxeño a través del tiempo. Estudio comparativo sobre su evolución.* La Paz: "Proinsa" Empresa Editora.

Block, David

1994 *Mission Culture on the Upper Amazon: Native Tradition, Jesuit Enterprise, and Secular Policy in Moxos, 1660-1880*. Lincoln: University of Nebraska Press.

Bolivia, República de

1995 *Censo indígena del Oriente, Chaco y Amazonía, 1994-1995: Amazonía.* La Paz: República de Bolivia.

Bouysse-Cassagne, Thérèse

1978 L'espace aymara: *Urco* et *uma. Annales: Économies Sociétés Civilisations* 33 (5-6): 1057-1080.

1987 *La identidad aymara: Aproximación histórica (siglo XV, siglo XVI)*. La Paz: HISBOL & IFEA.

Carvalho Urey, Antonio

1976 *Pedro Ignacio Muiba, el héroe.* Trinidad: Universidad Boliviana "José Ballivián".

Chávez Suárez, José

1986 *Historia de Moxos.* La Paz: Editorial Don Bosco.

Coello de la Rosa, Alexandre

2001 Discourse and Political Culture in the Formation of the Peruvian *Reducciones* in the Spanish Colonial Empire (1533-1592). Ph.D. dissertation. State University of New York.

Cushner, Nicholas P.

1980 *Lords of the Land: Sugar, Wine, and Jesuit Estates of Coastal Peru, 1600-1767*. Albany, NY: State University of New York Press.

1982 *Farm and Factory: The Jesuits and the Development of Agrarian Capitalism in Colonial Quito, 1600-1767*. Albany, NY: State University of New York Press.

1983 *Jesuit Ranches and the Agrarian Development of Colonial Argentina, 1650-1767*. Albany, NY: State University of New York Press.

Díez Astete, Alvaro & David Murillo

1998 *Pueblos indígenas de tierras bajas: Características principales.* La Paz: Ministerio de Desarrollo Sostenible y Planificación, Viceministerio de Asuntos Indígenas y Pueblos Originarios & Programa Indígena-PNUD.

Duviols, Pierre

1972 *La lutte contre les religions autochtones dans le Pérou colonial: "L'extirpation de l'idolâtrie" entre 1532 et 1660*. Lima: Institut Français d'Études Andines.

Fraser, Valerie

1990 *The Architecture of Conquest: Building in the Viceroyalty of Peru, 1535-1635*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fuenzalida Vollmar, Fernando

1967-1968 La matriz colonial de la comunidad de indígenas peruana: Una hipótesis de trabajo. *Revista del Museo Nacional* 35: 92-123.

Gade, Daniel W. & Mario Escobar

1982 Village Settlement and the Colonial Legacy in Southern Peru. *The Geographical Review* 72(4): 430-449.

García Recio, José María

1988 *Análisis de una sociedad de frontera: Santa Cruz de la Sierra en los siglos XVI y XVII.* Sevilla: Diputación Provincial de Sevilla.

Gill, Wayne

1993 Diccionario trinitario-castellano y castellano-trinitario. MS. n.p.: Misión Nuevas Tribus.

n.d. Conversación y gramática trinitaria. MS. San Lorenzo de Moxos: Misión Nuevas Tribus.

Góngora, Mario

1975 *Studies in the Colonial History of Spanish America*. Richard Southern (trans.) Cambridge: Cambridge University Press.

Jones, James C.

1980 Conflict between Whites and Indians on the Llanos de Moxos, Beni Department: A Case Study of Development from the

Cattle Regions of the Bolivian Oriente. Ph.D. dissertation. The University of Florida.

Julien, Catherine J.

1983 *Hatunqolla: A View of Inca Rule from the Lake Titicaca Region.* Berkeley: University of California Press.

Klein, Herbert S.

2003 *A Concise History of Bolivia.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lumbreras, Luis G.

1974 *The Peoples and Cultures of Ancient Peru.* Betty J. Meggers (trans.) Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

MacCormack, Sabine

2007 *On the Wings of Time: Rome, the Incas, Spain, and Peru*. Princeton: Princeton University Press.

Málaga Medina, Alejandro

1972 Toledo y las reducciones de indios en Arequipa: Aspecto demográfico. *Historiografía y Bibliografía Americanistas* 16(3): 389-400.

1974a Las reducciones en el Perú (1532-1600). *Historia y Cultura* 8: 141-172.

1974b Las reducciones en el Perú durante el gobierno del virrey Francisco de Toledo. *Anuario de Estudios Americanos* 31: 819-842.

1975 Las reducciones en el virreinato del Perú (1532-1580). *Revista de Historia de América* 80: 9-42.

1979 Aspecto urbano de las reducciones toledanas. *Revista de Historia de América* 88: 167-183.

1993 Las reducciones toledanas en el Perú. In Ramón Gutiérrez (ed.) *Pueblos de indios: Otro urbanismo en la región andina*, pp. 263-316. Quito: Ediciones Abya-Yala.

Marzal, Manuel M.

1992-1994 *La utopía posible: Indios y jesuitas en la América colonial (1549-1767)*. 2 vols. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Melià, Bertomeu

1995 Y la utopía tuvo lugar...: Las reducciones guaraní-jesuíticas del Paraguay. In María Concepción García Sáiz (ed.) *Un camino hacia la Arcadia: Arte en las misiones jesuíticas de Paraguay*, pp. 33-44. Madrid: Secretaría de Estado de Cooperación Iberoamericana/AECI & Ministerio Español de Asuntos Exteriores.

Mörner, Magnus

1968 *Actividades políticas y económicas de los jesuitas en el Río de la Plata: La era de los Habsburgos.* Dora D. de Halperin (trans.) Buenos Aires: Editorial Paidos S.A.I.C.F.

1970 *La corona española y los foráneos en los pueblos de indios de América.* Estocolmo: Almqvist & Wiksell.

Murra, John V.

2002 *El mundo andino: Población, medio ambiente y economía.* Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú & Instituto de Estudios Peruanos.

Olza Zubiri, Jesús, Conchita Nuni de Chapi & Juan Tube

2004 *Gramática moja-ignaciana* (*Morfosintaxis*). Cochabamba: Editorial Verbo Divino.

O'Malley, John W. et al. (eds.)

1999 *The Jesuits: Cultures, Sciences, and the Arts, 1540-1773*. Toronto: University of Toronto Press.

2006 *The Jesuits II: Cultures, Sciences, and the Arts, 1540-1773*. Toronto: University of Toronto Press.

O'Phelan Godoy, Scarlett

1997 *Kurakas sin sucesiones: Del cacique al alcalde de indios* (*Perú y Bolivia 1750-1835*). Cuzco: Centro de Estudios Regionales Andinos Bartolomé de Las Casas.

Ott, Willis & Rebecca Burke de Ott

1983 *Diccionario ignaciano y castellano con apuntes gramaticales.* Cochabamba: Instituto Lingüístico de Verano.

Pagden, Anthony

1982 *The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative Ethnology.* Cambridge: Cambridge University Press.

1990 *Spanish Imperialism and the Political Imagination: Studies in European and Spanish-American Social and Political Theory 1513-1830*. New Haven: Yale University Press.

Palomera Serreinat, Lluís

2002 *Un ritual bilingüe en las reducciones del Paraguay: El manual de Loreto (1721)*. Cochabamba: Editorial Verbo Divino, Compañía de Jesús & Universidad Católica Boliviana.

Parejas Moreno, Alcides

1976 *Historia de Moxos y Chiquitos a fines del siglo XVIII.* La Paz: Instituto Boliviano de Cultura.

Penry, Sarah Elizabeth

1996 Transformation in Indigenous Authority and Identity in Resettlement Towns of Colonial Charcas (Alto Perú). Ph.D. dissertation. The University of Miami.

Platt, Tristan

1987 The Andean Soldiers of Christ: Confraternity Organization, the Mass of the Sun and Regenerative Warfare in Rural Potosí (18th-20th Centuries). *Journal de la Société des Américanistes* 73: 139-192.

Rasnake, Roger Neil

1988 *Domination and Cultural Resistance: Authority and Power among an Andean People.* Durham: Duke University Press.

Reiter, Frederick J.

1995 *They Built Utopia (The Jesuit Missions in Paraguay) 1610-1768*. Potomac, MD: Scripta Humanistica.

René-Moreno, Gabriel

1974 *Catálogo del archivo de Mojos y Chiquitos.* La Paz: Librería Editorial Juventud.

Riester, Jürgen

1976 *En busca de la loma santa.* La Paz: Editorial Los Amigos del Libro.

Roca, José Luis

1992 *Mojos en los albores de la independencia boliviana（1810-1811）*. La Paz: Editorial Don Bosco.

Rose, Françoise

n.d. Dialectes en danger: Évaluation de la variation dialectale auprès des derniers locuteurs. *Faits de Langues* 35-36（à paraître）.

Saignes, Thierry

1985 *Los Andes orientales: Historia de un olvido.* Cochabamba: Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social.

1990 *Ava y Karai: Ensayos sobre la frontera chiriguano（siglos XVI-XX）*. La Paz: HISBOL.

1991 Lobos y ovejas: Formación y desarrollo de los pueblos y comunidades en el sur andino（siglos XVI-XX）. In Segundo Moreno & Frank Salomon（eds.）*Reproducción y transformación de las sociedades andinas, siglos XVI-XX*, v. 1, pp. 91-135. Quito: Ediciones Abya-Yala & MLAL.

齋藤晃（Saito, Akira）

2002「福音の言語――新大陸におけるイエズス会の言語政策」杉本良男編『福音と文明化の人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 31）pp. 99-134, 大阪：国立民族学博物館。

2003「戦争と宣教――南米イエズス会ミッションの捕食的拡張」『国立民族学博物館研究報告』28（2）: 223-256.

2004 The Cult of the Dead and the Subversion of State Justice in Moxos, Lowland Bolivia. *Journal of Latin American Lore* 22(2): 167-196.

2005 Las misiones y la administración del documento: El caso de Mojos, siglos XVIII-XX. In Clara López Beltrán & Akira Saito（eds.）*Usos del documento y cambios sociales en la historia de Bolivia*, pp. 27-72. Osaka: National Museum of Ethnology.

2007 Creation of Indian Republics in Spanish South America.『国立民族学博物館研究報告』31（4）: 443-477.

Serulnikov, Sergio

2003 *Subverting Colonial Authority: Challenges to Spanish Rule in Eighteenth-Century Southern Andes.* Durham: Duke University

Press.

Sordo, Emma María

1995 Las reducciones en Potosí y su carácter urbano. *Revista Complutense de Historia de América* 21: 231-239.

2000 Civilizational Designs: The Architecture of Colonialism in the Native Parishes of Potosí. Ph.D. dissertation. The University of Miami.

Spalding, Karen

1984 *Huarochirí: An Andean Society under Inca and Spanish Rule.* Stanford, CA: Stanford University Press.

Steward, Julian H. (ed.)

1946-1959 *Handbook of South American Indians*. 7 vols. Washington, D.C.: Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institution.

Stoetzer, O. Carlos

1979 *The Scholastic Roots of the Spanish American Revolution.* New York: Fordham University Press.

Thomson, Sinclair

2002 *We Alone Will Rule: Native Andean Politics in the Age of Insurgency.* Madison, WI: The University of Wisconsin Press.

2005 'Cuando sólo reinasen los indios': Recuperando la variedad de proyectos anticoloniales entre los comunarios andinos (La Paz, 1740-1781). In Forrest Hylton et al. (eds.) *Ya es otro tiempo el presente: Cuatro momentos de insurgencia indígena*, pp. 39-77. La Paz: Muela del Diablo Editores.

Tierney, Brian

1997 *The Idea of Natural Rights: Studies on Natural Rights, Natural Law, and Church Law, 1150-1625*. Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans Publishing Company.

Tormo Sanz, Leandro

1972 Situación y población de los mojos en 1679. *Revista Española de Antropología Americana* 7(2): 151-159.

Vargas Ugarte, Rubén

1964 *Historia de la Compañía de Jesús en el Perú*. V. 3. Burgos: Imprenta de Aldecoa.

Wachtel, Nathan（ワシュテル、ナタン）

1990 *Le retour des ancêtres: Les Indiens urus de Bolivie, XXe-XVIe siècle. Essai d'histoire régressive.* Paris: Éditions Gallimard.

1992 Note sur le problème des identités collectives dans les Andes méridionales. *L'Homme* 122-124: 39-52.

1997 『神々と吸血鬼――民族学のフィールドから』齋藤晃訳、東京：岩波書店。

Wightman, Ann M.

1990 *Indigenous Migration and Social Change: The Forasteros of Cuzco, 1570-1720*. Durham: Duke University Press.